

A. 自然

9. 宇宙創造の全貌に迫る

(聖書全体が明らかにしている宇宙創造の奥義)

はじめに

大野キリスト教会は、新会堂献堂記念講演会として、3回の神学講演シリーズを企画した。今日は、その2回目である。このような講演の機会が与えられ、心より主に感謝する。この講演会には、キリスト者だけでなく、ノンクリスチャンの方々にも参加していただきたいと願っている。取り上げるテーマは、「科学と神学」のテーマであるが、誰にでも分かるように話すつもりである。

最近、宇宙に関するいろいろな講演会やサイエンス・カフェに出かけ、有名な専門家の話を聞く機会に恵まれている。どなたの話聞いても、とても分かりやすい。もとより素人の私である。専門的なところまで、正確に分かるまでとはいえない。だが、講師が言わんとすることは、ほとんど理解できる。大抵は、難しい言葉を使わず、順序立てて話されるからである。自分も、聖書や神学の話をするとき、そんなふうに話したいと思っている。

先週の講演では、「世界はどのように造られたのか」というテーマで話した。創世記1章を、できる限り先入観をもたずに読むよう努めた。かなり斬新なアプローチをした。神の視点に立ち、時系列的な読み方をするのではない。古代中近東に生きた著者の観点に立ち、安息日神学に基づいて読むのである。この点について簡単におさらいし、今日はさらに奥深く、「創造の世界」に踏み込みたい。

創世記1章は、すべてのキリスト者が親しんでいる。それだけではなく、キリスト教の世界を飛び越え、人類にとっての宝物である。世界の創造に始まり、人間の堕落をとおって、ノアの洪水からバベルの塔に至る一連の物語は、人類文化史の金字塔といってよい。これほど大きな影響を与えた文学は、この世界にない。世界文化遺産の筆頭にあげられてもおかしくない。

ところが、この創世記1章のメッセージを正しく受けとめている人は少ない。一般の人々は、古代中近東の神話だと思っている。世界のベストセラーの冒頭部分だからと、何となく畏敬の念はもたれている。だが、実際に手に取って読む人は少ない。

では、キリスト者の世界ではどうか。聖書の初めの部分なのだから、誰でも手に取って読み始める。科学的にはちょっと変だなと感じることもあるが、聖書だからきっと真理なのだろう、そんなふうに思って読み進む。何か自分の信仰に役立つ教えがあるに違いない、そんな期待をもちながら。

時々、すべてを文字どおりに解釈し、変に確信に溢れているクリスチャンに出会う。先日も、「一日」は24時間で、宇宙は記述どおりの順番で造られた、「種類に従って」という言葉は進化論を否定している、そう考えている牧師と話をした。神学校の教え子だったので、とても複雑な気持ちだった。

私の周囲は、こんな状況である。だから、創世記1章を、きちんと正確に読む必要がある。そう思い、先回の講演では、創世記1章のテキストを丹念に解説した。著者の言わんとするところを、できる限り正確に理解しようと努めた。

それを踏まえ、今日は三つの事柄を扱いたいと思う。

まず、創世記1章の解釈上の問題を整理する。著者や読者、資料の問題、物語として読むこと、著者の表現技

法、古代中近東の文化的背景、科学との関係、宇宙を神殿に見立てることなどについてふれる。

二番目は、宇宙創造に言及している創世記以外の旧約聖書のテキストを取りあげる。それぞれの文脈を尊重しつつ、創世記 1 章の創造と関連づけながら、解説する。

三番目は、新約聖書の中で、創造に関わりのあるテキストを取り上げる。

普段あまり考えることのない話題や聖書箇所が多くなるだろう。だが、未知の世界に踏み込む楽しさを味わってもらいたい。信仰が聖書の真理に近づき、奥行き深いものに変えられていくという体験をしていただきたい。信仰の歩みが豊かにならないような聖書や神学の学びは、やめた方がよい。どこかがおかしいのだから。

I. 創世記 1 章の解釈上の諸問題

先週の講演では、創世記 1 章の本文を解説した。通常の聖書研究では、本文に入る前に、著者(編者)は誰か、想定される読者はどのような人か、資料は使われたのか、全体はどのような構造なのか、そういう問題を扱う。それは、聖書学上では緒論問題と言われ、一般には、聖書本文の解釈には不可欠なものと考えられている。

ところが我々は、この種の問題をバイパスし、いきなり創世記 1 章の本文に取り組んだ。かなり無謀な読み方である。一般の書物でも、まず、著者のプロフィールやまえがき、あるいはあとがきなどを読む。冒頭の推薦文や巻末の解説などの予備知識から入れば、著者の執筆意図も理解しやすい。だが我々は、そういう手続きは一切省いた。いきなり本文にアプローチした。それには理由がある。従来の読み方はいずれも不十分なもので、誤った先入観になってしまう。そういう予備知識はない方がよい。そう確信したので、あえて直接、聖書本文に向かった。

例えば、創世記 1 章の著者問題を取り上げてみよう。

学者の間では、大きく分けると、紀元前 14 世紀のモーセ説と紀元前 6 世紀頃の祭司説とに分かれる。どちらの説に立つかで、本文の読み方はかなり違ってくる。一方、読み方次第で、著者が誰であるかが決まってくる。まさに循環論法の世界である。前者を取れば、伝統的な保守的立場となり、結局伝統的な読み方になる。後者を取れば、現代の聖書批評学の立場となり、本文をいくつかの資料に分類して解釈することになる。

どちらの意見にも、それぞれの言い分がある。本当は、両方の主張を客観的に学び、それからそれぞれの読み方をじっくり比較するのがよい。そうすれば、どちらかの立場に納得するだろう。あるいは、どちらの立場にも納得できないかもしれない。そのときは、第三の道を探せばよい。ただ我々には、そんな時間的余裕はない。とすれば、どちらの意見にも加担せず、いきなり本文に向かわざるを得ない。実は、創世記 1 章の緒論問題がどうであっても、著者が言わんとする趣旨は、概ね理解できる。というわけで、先回の講演では、いきなりテキストそのものの解説を試みた。

1. 著者、読者、構造などについて考える

創世記には、たくさんの物語が出てくる。世界の創造に始まり、最初の家族の誕生、人間の墮落、兄弟間の殺人事件、洪水による神の裁き、バベルの塔事件、アブラハムの生涯、イサクの生涯、ヤコブの生涯、ヨセフの生涯等々である。創世記全体は、神が「一つの家系」を選び、導かれた「神の物語」である。

この創世記に、興味深い一つの言葉が 11 回出てくる。ヘブル語の「トレドート」で、その後に続く記録のタイトルになっている。トレドートのタイトル、聖書箇所、及びその内容は以下のとおりである。

(最初のタイトル「初めに神は天と地を創造された」、1:1-2:3、七日間にわたる創造の記録)

第一のトレドート「天と地が創造されたときの経緯」、2:4-4:26、エバの創造、墮落、カインとアベル

第二のトレドート「アダムの子孫の歴史」、5:1-6:8、アダムからノアまでの系図

第三のトレドート「ノアの歴史」、6:9-9:29、洪水による神の裁き

第四のトレドート「セム、ハム、ヤペテの歴史」、10:1-11:9、ノアの子孫の系図、バベルの塔

第五のトレドート「セムの歴史」、11:10-26、セムからアブラハムまでの系図

第六のトレドート「テラの歴史」、11:27-25:11、アブラハムの生涯

第七のトレドート「イシュマエルの歴史」、25:12-18、イシュマエルの系図

第八のトレドート「イサクの歴史」、25:19-35:29、イサク及びヤコブの生涯

第九のトレドート「エサウ、すなわちエドムの歴史」、36:1—36:8、エサウの生涯

第十のトレドート「エドム人の先祖エサウの系図」、36:9-37:1、エサウの子孫の系図

第十一のトレドート「ヤコブの歴史」、37:2-50:26、ヨセフの生涯

では、このトレドートについて、いくつかのコメントを記しておこう。

第一は、トレドートの意味である。トレドートの語源は「ヤラド(生まれる)」で、「生み出されたもの」を意味する。例えば、11 章 27 節に「テラの歴史(トレドート)」というタイトルが出てくる。普通、「テラの歴史」といえば、テラ自身の歴史が書かれる。ところが、その聖書箇所(11:27-25:11)は、テラの息子アブラハムの生涯である。テラについては、その直前の 11 章 24-26 節に出てくるのみである。結局「テラのトレドート」とは、「テラが生み出したもの」という意味で、「テラの息子アブラハム」を指す。すると、「テラのトレドート」は、「テラの歴史」ではなく、「アブラハムの歴史」と訳す方が実態に合う。

第二は、最初の「創造のタイトル」には、トレドートがないことである。トレドートが最初に出てくるのは 2 章 4 節で、それは、2 章 4 節から 4 章 26 節までのタイトルである。すると、1 章 1 節から 2 章 3 節の記述には、トレドートのタイトルがなかったことになる。すると、創世記は、トレドートのない天地創造の資料を含め、初めから 12 の資料で構成されていたのか、それとも、資料はもともと 11 しかなく、それをまとめた編者が、最初に創造の話をつけ加えたのか。どちらでもよさそうなこんな問題を、旧約聖書の研究者たちは、喧々諤々の議論をしている。

前者であれば、最初の資料は天地創造の話で、天地創造以前の出来事はないわけだから、トレドートを使いたくても使えなかった、という理屈になる。後者であれば、資料の編纂者が、アダム創造から創世記が始まるのは唐突だと感じ、アダムが造られるまでの経緯を追加した、ということになる。どちらであっても、証拠があるわけではない。解釈上にも、さしたる影響はない。

どちらがよいのか、皆さんの判断で結構である。理系の問題とは違い、この種の問題の正解は一つではない。ものは考えよう、なのである。そんな無意味なことに時間を使いたくない、そういう人がいれば、それも立派な答えである。専門家は、しばしばどちらでもよいことに無駄なエネルギーを使う。時々大当たりで、思いもかけない益をもたらすことがある。そういう世界なのだ(笑い)。

第三に、これらのトレドート(資料)は、何の目的で、誰によって、どのように保管されてきたのか、という問題である。近隣のメソポタミアやエジプト社会では、似たような話がさまざまな形で継承されてきた。大抵の話は、家系の秘話として、親から子へ、子から孫へと口頭で伝えられた。しかしあるものは、途中で文書の形で保存されるようになる。一口で資料というが、民族の伝承叙事詩、宗教行事の典礼文書、管理的役人たちのさまざまな記録、学校の教科書、図書館の蔵書、商取引の契約文書、法令上の文書、支配者の統治記録や戦勝記録、日記類など、いろいろなものがある。粘土板もあれば、パピルス文書、さまざまな種類の碑文など、伝承の形もさまざまである。

ただ、神の民イスラエルの場合は、不明なところが多い。特にエジプト以前の族長時代に関していえば、創世記に暗示されているもの以外、直接的な資料は見つかっていない。

四番目に、これらのトレドートの編者は、手を加えずそのまま編纂したのか、それとも編集作業を経て現在の形態にまで仕上げたのか、という問題である。我々が手にしている一つ一つのトレドートは、内容も表現もきわめてバラエティーに富んでいる。誰かによって統一された形跡はない。受け継いだものをそのまま合体させた、そう考えるのが自然である。たとえ手が加えられたとしても、ごくわずかだったろう。編者のもとに集められる前の段階では、さまざまな手が加えられたかもしれない。しかし、いったん編者によってまとめられたなら、その後は大きな変更はなされなかった、と考えてよい。

五番目は、編者がまとめた 12 の資料集の最初の読者は誰だったかという問題である。ある文書が生まれてくるのは、その文書を必要とする人々がいたからである。そういう背景が無いなら、創世記に限らず、いかなる文書も世に出てくることはなかった。天地創造、人類の発生、ノアの洪水、バベルの塔、族長たちの歩みなどを振り返り、民族のアイデンティティーを必要とした人々は誰だったのか。モーセと共にエジプトを脱出し、約束の地を目指していたイスラエルの民だったのではないだろうか。彼らは、先祖が信じてきた神は部族的な神ではなく、天地の創造者であり、唯一の神であることを確認する必要があったのである。

六番目に、12 の資料の編纂者は誰だったのか、という問題である。私は、イスラエルの民に十戒を与えたモーセだったと思っている。ユダヤ人の伝統的な理解、キリスト教神学の総合的な解釈、古代中近東の文献学的な考

察からの結論である。少なくとも、そう考えて不都合なことは何もない。むしろモーセというとき、モーセ個人に限定する必要はない。モーセの側近が、モーセの監督のもとに、モーセの名で編纂し、モーセの権威で公刊した、ということである。しかも、創世記 1 章に関していえば、その時以降の伝承過程で、その表現に多くの工夫が加えられてきたのではないかと考えている。この工夫は、一般に言われる文学類型とか文学技法とは違う。むしろ、「表現技法」とでも呼んだらいいのではないかと考えている。

18 世紀に起こった聖書批評学は、神の名前の違いを基に、モーセ五書を JEDP と呼ばれる資料に分析した。むしろその方法論には、聞くべき事柄がたくさんある。だがそれは、合理主義的考えに固執し過ぎるきらいがあり、古代中近東の文献を扱う方法としては違和感を覚える。むしろ、最近の「物語批評」のアプローチに、私自身は親和性を覚えている(この物語批評については、次の項目でふれる)。資料分析を鵜呑みにせず、表現技法のレベルで扱う方が、歴史の真実に近づきやすいと考えている。

七番目は、解釈原理の一貫性という問題である。保守派のあるグループは、次のような議論を展開している。12 章から 50 章までの歴史性を信じるのであれば、1 章から 11 章までの歴史性も信じなければならない。とすれば、11 章までの系図は文字どおりに受け取るべきである。1 章の「一日」も、むしろ 24 時間を指す。これらの年代を合算すると、宇宙創造の年代は紀元前 4,000 年頃になる。聖書は神の啓示で間違いないはずだから、その字句は文字どおりに受け止めねばならない。これが解釈の一貫性ということである。教会がその原則から逸脱することは、背教を意味する、というのである。

この講演を聞いておられる皆さんの中には、このような考えを教えられ、そのように信じてきた方々がいらっしゃると思う。いわゆる「創造科学」という考え方である。これは福音主義にとっては大切な問題である。時を改め、時間をじっくりかけて話させていただく。今は、トレドートの問題に留めて話しておきたい。

トレドートの一つ一つは、それぞれいろいろな背景の中で生まれ、継承されてきた。従って、すべてのトレドートは散文体であるから歴史的に正しい、それゆえ文字どおりに解釈しなければならないという主張は、乱暴すぎる。すべてのトレドートの文学ジャンルは一つではない。従って、一つの解釈原理を当てはめるとするのは無謀である。一つ一つのトレドートを細かく検討し、それぞれにふさわしい解釈法を見極めねばならない。加えて、創世記に編纂されたトレドートは、イスラエル民族の中で継承されてきたごく一部のものである。このような情報のみで、宇宙の始まりから人類史のすべてをカバーする歴史を構築することは無理である。イスラエル民族の中に継承されてきたトレドートは、神がモーセ時代の民に語られた「神の物語」である。その視点から、創世記 1 章を読まねばならない。

ここで、この講演をお聞きの皆さんに、一つのことをチャレンジしていただきたい。何人かの仲間をつくり、創世記の 12 の資料の一つ一つを取り上げ、ああでもない、こうでもないとして自由に話し合っていていただきたい。専門の辞書や註解書、参考書や説教集などを参考にすることは構わない。だが、必ずしも必要ではない。聖書自体を、多くの目で一緒に読むのである。どんな発想、感想、意見、コメント、疑問も大歓迎。フリートーカーで、仲間との交わりを楽しんでほしい。

司会者は必要だが、教師はいらない。皆が同列で、ワイワイ、ガヤガヤとやるのがよい。できれば、古代人、イスラエル民族の一員になったつもりで話し合うのがよい。意見の違いが出たら、そのままにしておくのがよい。分からないところが出てきても、宿題にしておけばよい(意外と誰かが、翌週には調べてくるものだ)。とにかく、他の人の読み方を尊重し、自分と違う考えに耳を傾けることだ。そうすると、聖書の面白さを経験できる。イスラエルの民は、長い間そういう読み方をしてきた。現代のキリスト者が追体験できたら素晴らしいと思う。

2. 神の物語として読む

聖書を理性的・合理的に研究する学問を聖書批評学という。それは 18 世紀後半に始まった。最初はプロテスタントの世界で盛んだったが、その後カトリックの世界にも多大な影響を及ぼした。19 世紀は、聖書の各書物の資料分析が中心だった(これを「資料批評」という)。20 世紀になると、その資料の文学様式が問題にされ、資料が生み出された背景(生活の座—Sitz im Leben)を探る研究へと発展した(これを「様式史批評」という)。さらに 20 世紀の半ばになると、それぞれの資料をまとめた編集者の意図(神学とも言われた)を探る研究が盛んになった(これを「編集史批評」という)。

この編集史批評をもって、聖書批評学は一応の完成を見たかのように思われた。ところが、その学問は 1980 年頃から思わぬ方向へと進展した。「物語批評」という、全く切り口の違う聖書の読み方を模索し始めたのである。私は、注解書を書く必要があり、1990 年代の後半から 10 年間、アメリカ、ヨーロッパ、オセアニア、アジアなど世界中

の聖書学に関連する学会のほとんどのに参加した。当時は、どこに行っても「物語批評」の話題で持ちきりだった。最初は新約聖書、特に福音書からだったが、瞬く間に旧約聖書にまで広がり、今では聖書全巻を「神の物語」として読むことが常識のようになりつつある。

最初聖書批評学に懐疑的だった福音派の学者たちも、編集史批評あたりから共通の基盤を見出すようになった。そして、物語批評になると、「わが意を得たり」というところもあり、むしろ福音派が中心になって推し進めるという様相を呈するようになった。むろん、今でもその流れに乗ることを警戒する福音派の学者たちもいる。だが、時代の流れは想像以上に早く進んでいる。そういう意味では、聖書批評学の歴史は、学問がたどる道に対し、多くの示唆を提供する。

これまでの福音派の神学校では、聖書の正しい解釈とは、歴史的、文法的、文脈的に理解することだった。聖書には、神の真理が啓示されている。それを知的にきちんと把握しなければならない。神は真理なる方である。だから啓示もまた、すべてを理解すれば、真理であることが分かる。神のみ言葉に仕える牧師は、この真理を明らかにする責任がある。それが説教であり、聖書研究である。そんなふうに教えられてきた。

しかし、ここに来て、新しい問題が投げかけられている。聖書は、歴史的事実を伝える目的で書かれたわけではない。キリストの救いを提示し、その応答を求めるために記された。ところが教会は、その聖書を歴史の書、教えの書に変えてしまった。ギリシャ哲学の嵐にさらされたからである。教会は、ギリシャ哲学に対抗し得るキリスト教哲学の構築を迫られ、宗教、歴史、哲学、科学の教科書として聖書を利用するようになったのである。その後キリスト教神学の中で問題になる「聖書の正典性」、「無謬性」、「解釈学」、「批評学」などは、皆この延長線上で論じられることになる。

しかし、実は、歴史を正確に書くことはできない。Dicta(記述したもの)は、人間の記述である限り、Facta(起こった事実)ではない。Dictaは、Factaを解釈してできあがったものである。我々は、ストレートにFactaには近づけない。Dictaを通してのみ、Factaに近づくことが可能である。だから、Dictaの性格を見極めることが、何よりも重要なことになる。

もう少し、分かりやすく話してみよう。

今年(2014年)の1月7日のことである。ハーバード大学マーシャル・ガンツ教授による「どうアプローチしたらいいのか。僕の中でいま方法論がなくて」というテレビ番組を見た。ガンツ教授が、共に働く人々を見出せずに困っているリーダーに答えていく、という番組だった。教授は、示唆に富む言葉を次から次へと発信していった。

人と人をつなぎ、新たな活動の輪をつくるのは、「自分の物語」を語ることにある。

状況を分析し、必要を訴えても相手に活動する勇気やきっかけを与えることはできない。

人々に行動を促すのは、理念ではなく感情に響いたときである。

大事なものは、その人を突き動かす動機である。

自分だけで何でもやろうとするのは、良いリーダーではない。

リーダーとは、目的を達成するため仲間を募り、彼らが力を発揮できる環境を整えることにある。

リーダーは、その根底にある価値観を言葉で表し、相手と共有しなければならない。

そのためには、「自分の物語」を語ることが不可欠である。

初め私は、この番組を説教者、あるいは牧師として見ていた。そのときは、面白い番組ではあったが、特別な感動はなかった。行動心理学やリーダーシップ論で既に語りつくされてきたことに過ぎず、目新しいことは何も無い、そう感じていた。出演者たちは、「自分の物語を語る」というアドバイスに感動しているようだった。でも、それも自分の経験から分かっている、そんなふうには思いながら見ていた。

ところが、ふと、とんでもない考えが頭の中をよぎった。もしかすると、神様も同じような行動を取られたのかもしれない、と。神はこの世界を創造された。そして、その世界を共同管理させようと、人々を招いている。自由意思をもつ人間が、自発的に、喜んで応答することを求めている。そのため神は、ご自分の物語を語り、人々に呼びかけているのではないのか。それが聖書ではないのか・・・。

確かに、他人を動かすのに、自分の物語を語ることは有効である。これは、人間にとっての「普遍的な原理」かもしれない。とすれば、神が人間に応答を求めるとき、この原理を使っているはずだ。無視されるはずはない、そ

んなふうに思えてきたのである。

これまでキリスト教界の中では、聖書は真理を明らかにしている書物だと見なされてきた。だが、この番組は私に、違う聖書の見方に気づかせてくれた。従来の聖書の真理性にこだわる読み方は、見当違いのことをしているのかもしれない。もし聖書が歴史書であるなら、歴史的に正確な記述をしていると期待して読むべきだろう。だが、もし神が、聖書をとおして、我々を神の救いや働きに招いているとすれば、神は我々に、「神の物語」を語っているのかもしれない。人間の行動原理を一番よくご存知なのは、神である。もしそうだとすると、神は、宇宙の創造のプロセスやイスラエルの歴史、イエスの生涯や教会の歩みを、歴史の事実として教えようとされたのではない。少なくともそれが主なる目的ではない。人をキリストの救いに招くために、聖書は記述された(ヨハネ 5:39-40、Ⅱテモテ 3:15)。とすれば、神は、聖書に「神の物語」を記し、人間に応答を求めたのではないだろうか……。

聖書には「神の物語」が記されている。それは、聖書をとおし、神の招きに応答させるためだった。聖書がそのような目的の書物であるとすれば、聖書を読むとき、歴史や科学や教理の整合性を問題にすることは、愚かなことではないか。この点については、牧師の説教を例にして話すと、理解しやすいかもしれない。

説教とは、人々に神の招きに応じるように語られた「牧師の物語」である。牧師は、物事をできる限り正確に話すように努力はしている。しかし、会衆に合わせて話すことはもっと重要である。人々に感動を与え、神に応答するように求めるのが説教だからである。そこでは「私の物語」が重要な要素になる。客観的な真理ではない。そのような目的をもつ説教に、正確な科学や歴史を語るよう求められるなら、悲劇に陥ることになる。無誤性が求められることなど、まさに論外である。聞き手あつての説教だからである。

聖書記事を「物語」と表現するのは、出来事を聴き手に意味あるものとして、分かりやすく伝えたいからである。物語的に読む場合、その出来事が実際にいつ、どこで起こったかは、さほど大きな問題ではない。例え話との境界線も、極めてあいまいなものになる。取税人ザアカイの話とレプタ二つをささげた婦人の話は、よきサマリヤ人や放蕩息子の話としばしば同レベルで語られる。ルカ 16 章のラザロの話になると、史実なのか、たとえ話なのかは、はっきりしない。旧約聖書では、ヨナの話、ヨブの話、ダニエルの話、エステルの話などになると、教訓的意図と史実との間に微妙な問題が起こる。否、このような聖書記事に史実性の問題を持ち込むこと自体が、問題なのである。神が人に応答を求めるために語られた「神の物語」と理解すれば、そういう問題意識そのものが現代的で特殊なものであることに気づく。

高校生時代のことである。聖書を読んでいたら、「こうして、日は天のまなかにとどまって、まる一日ほど出て来ることを急がなかった」(ヨシュア 10:13)という文章に出会った。とてもびっくりした。たった一日であっても、否、一日だからこそ、地球の自転が止まることなどあり得ない、そう思って、信仰の先輩に聞いてみた。すると、そういう疑問をもつこと自体が神に対する不信仰だと叱られた。そして、『聖書と科学』という書物を貸してくださった。そこには、世界史の資料の中には「失われた一日 (missing day)」があったことを示唆する歴史的証言が紹介されていた。もしそうであれば、遠心力によって地球上のすべてのものがどこかに飛んで行ってしまうのではないか、そういう私の疑問には答えていなかったが。

その後、それに続く「主がイスラエルのために戦ったからである」という文章から、神の戦いによって二日分の戦果があったという詩的表現だと教えられた。もっと早く教えてくれればこんなに悩まなくてもすんだのに、と恨みがましい気持ちになったことを鮮明に覚えている。詩的な表現と読むと、この箇所では神が言いたいことはよく分かる。そんな経験をとおして、科学とか史実を問題にしながら聖書を読むことの間違いを教えられた。キリスト者は、「神の物語」という聖書の本性を理解して、聖書を読む必要がある。そこから外れると、神の意図から逸脱し、問題でないことを問題にしてしまう危険性がある。

「物語」という言葉に、違和感を覚える人があるかもしれない。しかしそれは、キリスト者にとって特別なものではない。牧師の説教は、聖書を物語的に読んで話すのが普通である。キリスト者が毎朝のデボーションで聖書を読むときにも、実は聖書を物語的に読んでいる。個人やグループで行う聖書研究も、自分の益を求めている場合には、同じである。批評学の書物を参考にしたり、無誤性を基に議論することは、キリスト者にとっては異常なことなのである。神の民としての普通の読み方は、聖書を神の物語として読むことなのである。

むしろ、物語的に読むときには、ある種の注意が必要である。読む人の考えや気持ちが過剰に入りやすい、ということである。人は、探しているものを見出すものである。だから、本当にそのようには言っていないくても、そう読

めてしまう、ということは少なくない。聖書の話の流れや聖書が語ろうとしている意図を飛び越え、自分の考えや主張を語らないように気をつけることは必要である。そのような行き過ぎをさせない力は、結局常識のセンスである。

この講演の目的は、創世記 1 章の世界創造の記録をどのように読んだらよいのか、ということにある。これ以上の聖書論の問題に踏み込むことは、今日の講演の趣旨から外れる。次回の講演でもう少し詳しくふれる。今日はこの辺でやめ、先に進みたい。

聖書全体は、一つの物語としての構造をもっている。創世記 1-2 章は、聖書全体の序論となっている。それに対し、ヨハネの黙示録 21-22 章は、結論部分を構成している。エデンの園には新しい都エルサレムが対応し、神が人とのすばらしい交わりをもっていることを描写している。今ある世界をスタートにして、新しい世界において完成する。その間に展開される出来事は、神が全人類を贖う御業に他ならない。この序論と結論を踏まえ、旧約聖書、モーセ五書、創世記、創世記 1 章へと、次第にフォーカスを絞って読んでいくのがよい。

ここではまず、「神の物語」という視点に立って創世記全体の流れを整理し、その後創世記 1 章に進もう。

創世記全体は 11 のトレドットから成り立ち、1 章はそれに追加されたものである。これらのトレドットの内、第二のトレドット(5:1-6:8)はアダムからノアまでの、第四(10:1-11:9)はノアの子孫の、第五(11:10-26)はセムからアブラハムまでの、第七(25:12-18)はイシュマエルの、第十(36:9-37:1)はエサウの子孫の系図である。11 のトレドットの内、5 つが系図であるということは、神は一つの家系、一つの民族に大きな関心をもっていたことを示唆する。神はある家系を、神の贖いの中心になる「神の民」へと招かれたのである。

その系図の合間合間に、神は、人類と関わったさまざまな物語を話してくださった。1 章 1 節から 2 章 3 節までは、神が六日間で世界を創造し、七日目に休まれたという「創造物語」である。その七日目は、今も続いている。つまり神の「創造物語」は、現在進行形の出来事なのである。この点は、本項目の六番目「神殿を宇宙支配の拠点として読む」において詳しくふれる。

続く 2 章 4 節から 4 章 26 節の最初のトレドットは、アダムとエバが造られ結婚したこと、二人がサタンからの誘惑を受け神に反逆してしまったこと、カインが弟のアベルを殺してしまうという忌まわしい事件を語っている。これは「人類最初の家族物語」である。

三番目のトレドット 6 章 9 節から 9 章 29 節は、神が堕落しきった人間を洪水によって滅ぼされたこと、その中で、ノアとその一家を救われたことを伝えている。これは「人間の堕落に対する神の裁き物語」である。

六番目の 11 章 27 節から 25 章 11 節までのトレドットは、アブラハムの生涯を描いている。アブラハムは、神の友と呼ばれるほどだった。神も、彼についてはたくさんのことを話したかったに違いない。これは「神の友アブラハムの信仰物語」である。

八番目の 25 章 19 節から 35 章 29 節のトレドットは、イサクとヤコブの生涯を描いている。神がこの二人の族長をどのように扱われたのかは、実に興味深い。これは、「約束の子たちの試練に会う物語」である。

続く九番目の 36 章 1-8 節のトレドットは、エサウの生涯を語っている。「傍流の人々の信仰物語」である。

最後の十一番目のトレドット 37 章 2 節から 50 章 26 節は、ヨセフとその兄弟、さらに父ヤコブの歩みを伝えている。神が神の民に試練を乗り越えていくために、どのように関わっていくのかを明らかにされた「万事を益とされるヨセフの物語」である。

物語であれば、モチーフがある。創世記全体のモチーフは、「神の民が増え、広がる」ということだった。1 章 28 節で、神はアダムに対し「産めよ、増えよ」と述べている。同じ祝福の言葉が、洪水後のノアに対しても(9:1)、アブラハムに対しても(12:2-3)、イシュマエルに対しても(17:20)、イサクに対しても(26:3-4)、ヤコブに対しても(28:3、48:3-4)語りかけられている。これは、出エジプト記に入っても続く。神が人類を祝福し、人類は大きく広がり続けている(出エジプト 1:7、12)。また神は、カナンを前にしたイスラエルの民に、彼らが約束の地で増え続けることを確認している(申命記 7:13-14、30:16 参照)。

創世記 1 章の「神の物語」は、神が万物の創造者であることを伝えている。神はその創造のクライマックスとして人間を造られた。神のかたちに造り、被造物を共に管理させようとした。人間以前の創造物は、人間生存に役立つように造られた。古代中近東の人々が神々として恐れていた太陽、月、星などは、神ご自身が創造し、支配している。従って、恐れる必要は一切ない。メソポタミアの人々が神に反逆したと信じていたレビヤタンさえも、海に生きる被造物の一つに過ぎない。

神の創造のわざは六日間で終わった。七日目になると、神は休まれた。休まれたというのは、疲れて寝りについたというイメージではない。創造のわざは完成し、そこからは解放された。それゆえ、神の働きは新しい段階を迎えた。完成した被造物を管理するという、新しい任務に就任されたのである。七日目は未だ終わっていない。ということは、その働きは今も継続中である。以上が、創世記 1 章の「神の物語」である。

3. 表現技法を考慮しながら読む

神は、「神の物語」を語るため、聖書記述者を用いた。神によって立てられた記者は、その物語をどのような文学ジャンルで著わすのか、決める必要があった。文学ジャンルには歴史、法律、説教、系図、伝記、劇文学、詩歌、格言、祈り、典礼賛歌、預言など、いろいろあった。歴史といっても、さらに民族伝承、家系秘話、民俗史、救済史、王制史、戦争史、教訓史、祭儀史などに分かれる。ジャンルごとに、内容も書き方もさまざまだった。

アメリカのある学会で、創世記 1 章が散文体か詩文体かをめぐって、激しい論争が展開された。散文体であれば歴史的・科学的な事実として読まねばならない、詩文体であればその限りではない、そういう問題意識がこの論議の背景にあった。例えば、出エジプト記 14 章は散文体である。それゆえ、そこに記述されているエジプト脱出の出来事は、歴史的な事実である。一方 15 章の方は詩文体である。従って、記述をそのまま史実と解釈する必要はない。このような議論が延々と展開された。

とても面白い論争だったが、何か違和感を覚えた。大体、散文体か詩文体かは、いつでも明確に区別できるわけではない。また、区別できたとしても、散文体であるから歴史的な事実をそのまま伝えている、詩文体だとそうではない、などと簡単に割り切れるものではない。確かに現代においては、歴史を詩文体で書くことは珍しい。しかし、古代の文書では、そうとは言えない。イスラエルの歴史が神によって導かれたことを歌っている詩篇は、たくさんある。歴史的な出来事が口頭伝承されるときには、ほとんど詩文体である。詩文体だと歴史的に正確ではないというのは、現代的センスでの歴史理解である。

創世記 1 章が散文体で書かれていることは、明らかである。詩文体と見なす学者はいない。問題は、散文体であるにもかかわらず、さまざまな表現手法が随所に出てくることにある。従って、ある学者は「詩的散文体」などと言い始めている。文学の卓越性は、比喩的な表現やさまざまな表現技法の使い方にかかっている。そのような表現技法が用いられているのは、詩文体の世界だけではない。散文体においても、ふんだんに用いられている。創世記 1 章は、典型的な例である。

創世記 1 章には、たくさんの表現技法が出てくる。6 節の「太空中」は、詩的な文章の中でよく使われている単語である(ヨブ 37:18、詩篇 19:1、150:1、箴言 8:28、哀歌 4:19、エゼキエル 1:22、23、26 など)。また、「プレシート(初め)」と「バーラー(創造する)」、「トーフー(茫漠)」と「ボーファー(準備が整っていない)」、「バーラー(創造)」と「バラク(祝福)」などの「言葉遊び」が頻繁に見られる。「キアスムス構文」やヘブル詩の「平行法」の用例もたくさん登場する。

詩篇 104 篇は詩文体である。創世記 1 章と同じように、世界の創造について歌われている。だが、その内容は驚くほど似ている。創世記 1 章は散文体なので、歴史的・科学的に正確である。しかし、詩篇 104 篇は詩文体なので、そうとは言えない、そんな評価を下されたら、創世記の著者も、詩篇の作者も目を丸くするに違いない。文学ジャンルや文学手法は、記述内容の歴史性とは関係がないのだから。

創世記 1 章の最も特徴的な表現技法は、安息日神学に基づいていることである。神は、十戒の四戒で安息日を守るよう定めた。この安息日の命令は、神が六日間で創造のわざを終え、七日目に休まれたことに基づいている(出エジプト 20:11、31:17)。1 章の記者は、この安息日の教えに基づき、世界創造のわざを六日間の枠組みの中にまとめたのである。

ただし、この創世記 1 章には、安息日という言葉は出てこない。出てくるのは、第七日目に神が完成されたとか、休まれたとか、聖とされたということである。この「七日目」という言葉が、安息日神学を表わすキーワードだった(2:2 に 2 回、2:3 に 1 回)。そして、創造の六日間を二つのフレームに分け、一日目と四日目、二日目と五日目、三日目と六日目に対応させた。この三日ずつに分けたのは、古代中近東の人々が、天と空と地の三つに分けて

考えるパターンに合わせたものである。

この安息日神学に基づく創造物語は、「7」という数字を巧みに使っている。例えば、神が被造物を生じさせるために語りかけた言葉は7回だった(4、7、12、16、21、25、27 節)。その結果、神が命じられたとおりになるのだが、著者はそれを「そのようになった」と表現している。その言葉も7回繰り返されている(3、7、9、11、15、24、30 節)。さらに神は、創造の段階が終わるたびに、「よしとされた」と満足感を表明している。その是認の言葉も7回登場する(4、10、12、18、21、25、31 節)。

「地(エレツ)」という言葉は21回、「天(シャマイーム)」を表わす表現(大空(ラキア)を含む)も21回、「神(エロヒーム)」は35回出てくる。「名づける(カラー)」は5回しか出てこないが、「祝福する(バラク)」が2回加わって合計7回になる。第一日には「光(オール)」が5回、「やみ(ホシェイク)」が2回出てくるので、合計7回になる。2節に出てくる「水(マイム)」は二日目と三日目で7回、光に関するものが第四日に7回出てくる。

この7という数字は、ヘブル語聖書で使われる文字数にまで反映されている。1章1節は、ヘブル語本文では7語で構成されている。1章2節は14語なので、序論部分の合計は21語になる。それに対し、結論部分の2章1-3節は35語である。1章1節から2章3節までは、全部で469語によって(7×67)記されている。

この「7」という数字が大切にされているのは、創世記1章だけではない。「神の物語」全体(聖書のこと)に及んでいる。本講演の趣旨からそれるが、興味深いことなので、紹介しておこう。

まずは、旧約聖書である。主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた(出エジプト 24:16)。モーセは、幕屋建設に必要な教えを七つにまとめて話した(出エジプト記 25:1、30:11、17、22、34、31:1、12)。この最後の31:12-17は、安息に関する教えである。祭司の任職の期間が終了する日までの七日間は、特別重要な期間だった。祭司職に任命されるには七日を要した(レビ 8:33-35)。祭司が病気からのきよめを確認するのにも、七日間が必要だった(レビ 13:5-6、なお 13:27、32、34、51、14:9、39 など参照)。

エリコ攻略にあたっては、七人の祭司たちが七つの雄羊の角笛を持ち、契約の箱の前に行った(ヨシュア 6:4)。七日目になると、朝早く夜が明けかかるところ、七度町を回った(ヨシュア 6:15)。神殿は七年で完成した(I 列王記 6:38)。第七の新月の祭りがあった(I 列王 8:2)。神殿奉獻の際、ソロモンは七つの願いをささげた(I 列王記 8:31-53)。七日間の祭りを祝った(I 列王 8:66)。両軍は互いに向かい合い、七日間陣を敷いた。七日目になって、戦いを交えた(I 列王 20:29)。祭りの七日間、傷のない七頭の雄牛と七頭の雄羊を全焼のいけにえとして、七日間毎日主にささげた(エゼキエル 45:23)。

「7」の重要性は、新約聖書においても変わらない。ヨハネの福音書は、七つの奇跡を挙げている。パンの奇跡は、五つのパンと二匹の魚によって起こった(マルコ 6:38)。罪の赦しについては、七の七十倍が求められた(マタイ 18:21-22)。イエスの話には七がよく出てくる(マルコ 12:20-23)。十字架上のイエスの叫びは、全部で七つだった(ルカ 23:34、43、46、ヨハネ 19:26、28、30、マタイ 27:46)。エルサレムに入場されてから、復活までの最後は一週間、七日だった(マタイ 28:1)。復活後イエスが弟子たちに再び現れたのは七日後のことである(ヨハネ 20:26)。エルサレム教会は七人の執事を選んだ(使徒 6:3)。パウロの働きにおいても七は重要だった(使徒 13:19、20:6、7、21:4、27、27:27、28:14、)。黙示録は、七つの御霊(1:4、3:1、4:5、)、七つの教会(1:4、7)、七つの金の燭台(1:12、2:2)、七つの星(1:16、2:2)、七つの封印(6:1)、七人の御使い(8:2、15:1、7、8、21:9)、七つのラッパ(8:2)、七つの雷(10:4)、七つの鉢(17:1)、七人の王(17:9)など、七の数字のオンパレードである。

お分かりいただけたでしょうか。「7」はまさに、神の働きを象徴する数字だった。「神の物語」においては、神がここにいますと、無言で語りかけている数字である。この事実を知って以来、日曜日の教会の礼拝に出席する意味が変わってきた。これまでの七日間、私の歩みの中で神が働き続けてくださったことを感謝する。そして新しく迎える七日間も、神が私の歩みを一つずつ導いてくださることに期待して祈る。教会の1時間の礼拝には、無駄なことは一つもない。だが、その中でも、この祈りをささげるときは、私にとって一番大切な時である。これが私の礼拝であり、この積み重ねが私の人生である。神は私の人生の中で「神の物語」を書いておられるのである。

4. 古代中近東の文化圏の中で読む

神は、「神の物語」を語られた。誰に対してか。神は、すべての人を愛され、すべての人を神の御国に招いている。しかし、神は、聖書の中に啓示された「神の物語」を、すべての人に向けて語られた。だから聖書は、古今東西を問わず、万人の書なのである。いつの時代の人が読んでも、読めば分かる、そういう書物である。辞書を引いたり、専門的な解説を聞かなければ分からない、というようなものではない。

聖書は、現在は一冊にまとめられている。ところが、もともとは違う著者により、異なった読者に向けられた 66 巻の書物だった。彼らが日常使っていた言語によって、その時代の世界観、歴史観、価値観の中で啓示されたものだった。

では、創世記 1 章の最初の読者は誰だったのか。もし著者がモーセか、モーセに近い人であったなら、その読者は、モーセと共にエジプトを経験したイスラエルの民だったはずである。著者は、同世代、もしくはせいぜい次世代の人々を意識して書いた。数百年後の人々を念頭に置くことはなかった。

彼らは、アブラハムの子孫であり、その信仰の継承者だった。メソポタミアやエジプトの文化、宗教、伝統に囲まれながら、唯一真の神を信じる道に招かれていた。従って、彼らは、古代中近東の人々と宇宙観をはじめ、多くの文化的な事柄を共有していた。神を信じたからといって全く違う世界観や価値観をもっていたと考えるのは幻想である。中世のキリスト者は中世の文化的影響のもとで信仰をもっていた。近代のキリスト者は、近代の文化の中で、現代のキリスト者は現代の文化の中で信仰を育てている。信仰をもった結果、捨てなければならぬものも確かにある。しかし、そのまま受け継いでいくものもたくさんある。この事実を踏まえずに創世記 1 章を読むと、結局現代人の感覚で聖書を読む間違いを犯すことになる。

メソポタミアとエジプトの文化的・宗教的状況はかなり異なっている。イスラエルの民がエジプト脱出を経験した時代、つまり紀元前 14 世紀前後は、どのような状態だったのか。

メソポタミア地方には、数多くの文献が発見されている。

まず、最も有名なものが、ギルガメッシュ叙事詩である。おそらく、2,500-2,000 年ぐらいの間に出来上がり、広く流布されていたと思われる。日本語にもいくつかの翻訳があり、手軽に読むことができる。ここでは詳しい説明は省かざるを得ないが、古代中近東の人々の世界を知るため、じっくり読むことをお勧めしたい。実は、お読みになると、聖書のすばらしさが分かってくると思う。

二番目に、ニップルから出土した紀元前 17 世紀頃の「エリドゥ創世記」を挙げておきたい。現存しているのはごく一部に過ぎない。そこには、人類の文明化が進んで騒々しくなったので、洪水によって裁かれる、という話が出てくる。ジウスドゥラ王がこの洪水についての警告を発し、船を作ったことが記されている。断片的な資料しか残されていないので、話の全体像はつかみにくいですが、創世記理解にはとても役立つ。

三番目に、紀元前 17 世紀半ばの頃の「アトラハシスの叙事詩」である。この話によれば、位の低い神々が働きに疲れてしまったので、その働きをさせるために人間を造ることになった。その人間の人口が増えて騒々しくなったので、人間は、災害、飢饉、洪水などによって滅ぼされてしまう。その際、動植物を船に入れて保護するところなどは、ノアの洪水に類似しており、大変興味深い。アトラハシス以外にも救われた人々はいると思われるが、現存する資料からははっきり言えない。

四番目に、前 1,100 年頃と思われるバビロニアの創造叙事詩「エヌマ・エリシュ」は、七つの粘土板から成るマルドゥク神の物語である。

マルドゥク神は、エア神とダムキナ神の間に生まれた。彼以前に生まれた神々、彼以降に生まれた神々が互いに争っている(第一の粘土板)。マルドゥク神は、反逆したティアマト神に勝利を治め、神殿の長に就任する(第二の粘土板)。その後大量の武器を手にしたマルドゥク神は、最終的な勝利者となり、ティアマト神の死体を引き延ばし、その上に世界を創造する(第三、第四粘土板)。マルドゥク神は、星、月、太陽などをつくって役割を与え、自らは神々の王に就任する(第五粘土板)。エア神は、ティアマト神のパートナーだったキング神の死体から人間をつくった。その人間が働くようになった結果、神々は働かなくなった。人間は、バビロン市をつくった(第六粘

土版)。マルドゥク神は、50 人の神々を指名し、最高の神としてあがめられるようになった(第七粘土版)

なお、ウガリットの古代海岸都市から出土したラスシャムラなどの文献には、バアルの神々の話が登場する。これは、バビロニアのマルドゥク神の話とはかなり違っている。

このようなメソポタミアの文献に対し、エジプトの文献はかなり趣を異にしている。聖書に関係しそうなものをいくつか紹介しておこう。

まず、メンフィス神学である。もともとは、3,000 年期半ばの古代王朝の時代につくられたものと推定される。それは、ピラミッド・テキストの創造物語に、メンフィスのプタ神を最高神として挿入して作り上げた話である。初めの創造神アトゥムも創造に関わっているが、この文献ではプタ神の方が創造のプロセスにおいて中心的な位置を占めている。

他に、ヘリオポリスの創造物語がある。この文献もまた、もともとは、ピラミッド・テキストやコッフィン・テキスト、死者の書などと深い関わりがある。最初の水の丘から創造神アトゥムが誕生し、そのアトゥム神の口から空気のシュ神と湿気のアムヘネット女神が吐き出される。この夫婦の神々から地のゲブ神と空のヌト神が生じる、という話である。

ヘルモポリスからの創造物語(コッフィン・テキスト)では、最初の水には、死、永遠、暗黒、不視の四つの性格がある。それぞれの性格には、一組の神々がついている。ヘルモポリスのトス神は、その 8 人の神々の頭になるわけである。ただし、その役割は不明なところが多い。

メソポタミアの方が、エジプトより混沌としている。マルドゥク神もエジプトのプタ神も、言葉によって創造を進めている。しかし、後者の方が、より言葉が中心になっている。マルドゥク神は創造を手で行っているが、エジプトのアトゥム神の方は自分の体から創造を始めている。前者は創造といってもよいが、後者は進化に近い感じがする。両方の世界とも、よく計画され考えられている点では共通している。

創世記 1-11 章は、バビロニアの創造神話「エヌマ・エリシュ」と類似しているところがある。従って、聖書批評学者たちは、両者に依存関係があったと考えてきた。ところが、最近のアッシリア学の専門家たちは、むしろ、シュメールの王のリスト、アトラハシスの叙事詩、エリドゥの創世神話との類似性により注目している。両者の間には、創造、王権の授受、洪水、新しいスタート、などのモチーフに共通性が見られるからである。といっても、両者に依存関係がある、というのではない。むしろ、創世記 1-11 章の読者たちは、このような類似した話をたくさん知っていたという前提で読むべきだ、と言いたいのである。そこには、神の物語が語られるための衣として用いられているものもたくさんある。チャレンジされていることもある。その両方を見極めながら「神の物語」を解釈することが求められているのである。

例えば、創世記 1 章に出てくる「水」が世界の原材料になること(2 節)、水が上の水と下の水に分けられたこと(7 節)、創造に区別するとか名づけるという言葉が使われていること(5、7 節)、太陽と月が大きな光る物と小さな光る物と言われていること(16 節)、星が、太陽や月より後に記されていること(16 節)、海の野獣が出てくること(21 節)、人間が「神のかたち」に創造されたこと(26 節)などは、当時の文献を理解するときに、新しい光をもって我々に語りかけてくれる。むろん、古代中近東の文化的な背景を一切知らなくても、「神の物語」を理解できる。しかし、もし知っているなら、より豊かなメッセージを受けることができるのだ。

創世記 1 章は、安息日神学に基づいて記されている。古代中近東の文献にも、聖書にも、創造の記録を七日間で完成したという記録は、この創世記 1 章以外にない。ところが、メソポタミアやウガリットの文献には、六日間活動し七日目に休むという生活パターンを示唆する記述がたくさんある。そのような生活スタイルは、異教的な背景をもっていた。神は、そのような生活のリズムを、イスラエルの民が出エジプトをしたとき、安息日の掟として与えた。それは、民が食物について不平を呟いたマナの事件の時だった。しかもその際、神は、ご自身が創造を六日で行い七日目に休まれた、という新しい意味づけをもって啓示されたのである。

バビロニアの創造叙事詩「エヌマ・エリシュ」にも、宇宙の創造、神殿、休み、王としての支配など、一連の出来事が描かれている。古代社会では、神が支配するための中心的な場所として神殿を建てた。神殿は神の居居で

あり、王宮であった。王宮とは、休みの場所ではなく、支配業務をこなしていく場所である。神々にとっては、戦いが終わって王位に就いたなら、休みがあるのではなく、王位の職務が王宮で待っているということだった。このことは、宇宙を神殿と見立てていく考え方に通じていく(この点は、第六項において詳述する)。

5. 現代科学の問題意識を読み込まない

多くのキリスト者は、聖書は神の啓示であり、科学的にも正しいはずだと考えている。もし科学と一致しないようなら、聖書は信じるに値しない、そう思っている。従って、無意識のうちに、創世記 1 章を科学と調和させながら読む習慣がついている。

先日、ある牧師が、創世記 1 章 3 節の「光よ。あれ」という言葉は、宇宙の起源のビッグバンを指している、と説教していた。彼はさらに、現代科学がビッグバンを発見する以前に、このような記述が存在すること自体、聖書が神の啓示であることを証明するとまで言い切っていた。神学校の教え子だったこともあり、後でそっと注意しておいたが、冷や汗ものだった。

創世記は、科学の教科書ではない。確かにそこには、神が世界を創造された事実が記されている。しかしそれは、宇宙の創造のプロセスを明らかにする意図で書かれたわけではない。著者は、自分の身の周りを眺めながら、この世界のすべてが神によって造られたことを描写したに過ぎない。彼は、その神の創造のわざを、安息日神学に基づいて描いた。同時代に生きる人々がそれを読み(あるいは聞き)、自分の信仰を確信するように、そして、心から神をほめたたえるようにと、記した。彼らが理解できないようなことは、できるだけ書かないように努めた。それは、当たり前のことだった。

著者と読者のこのような状況を踏まえ、創世記 1 章を現代科学の問題意識から読み取ろうとするキリスト者が、何と多いことだろう。もしそういうことを続けていくな、ものごとをまじめに考える人たちから、聖書と信仰を遠ざけてしまう。即刻やめるべきだと思う。これまでの福音派の教会は、聖書は神の啓示であり、永遠・絶対・普遍的な真理を教えている、と信じてきた。科学が進めば進むほど、それは聖書に一致する、そんなふうに来てきた。はっきり言おう。それは幻想である。

聖書を科学的に読むことがおかしいことについては、キリスト教神学では昔から気づいていた。古代の教父オリゲネス(185-254 年)やアウグスティヌス(354-430 年)でさえ、創世記 1 章の一日目に光が現われて昼と夜が生じたことと、太陽、月、星が四日目に造られたこととの間に矛盾のあることを指摘している。彼らは、創造の「一日」を文字どおりではなく、比喩的に解釈していたのである。

しかし、聖書に矛盾を認めたくない人々はいつの時代にもいた。彼らは、屁理屈をこねくり回し、その矛盾を説明してきた。例えば、一日目と四日目との矛盾については、最初の三日間は、太陽とは別の一日を区別するものを備えていたはずだ、と説明する。それは、具体的にはどのようなものと聞き返すと、そんなことは分からない。神に聞いてほしい、と返答する。自分が出した説明なのだから、自分に答える責任がある。その程度のことも分からない学者であっては困る。どのような解釈をしようと自由である。だが、何かを言う以上、説得力のある答えを出すべきである。それは、神のなさったことだから我々には分からないとか、今後科学が発展すれば分かってくるはずだなどと、逃げの論理を使うのは不正直である。

こんな説明も、聞いたことがある。「日」と訳されたヘブル語「ヨーム」は、旧約聖書ではいろいろな訳が可能で、必ずしも 24 時間の一日を指すわけではない。従って、「一日」はある一定の長い期間と考える方がよい。さらにまた、次のような説明をしている学者もいた。一日から三日目までの「一日」と、四日目の太陽が造られてからの「一日」とは違う。四日目以降の一日は 24 時間だが、それ以前はもっとずっと長い期間だった、と。

「一日」に関しては、いろいろな解釈が提案されている。何とか、聖書と現代科学との矛盾を解消したいからである。整合性を取り、認知的不協和を少しでも和らげたい、というのが本音なのだ。しかし、いろいろ説明をしてみても、実際にはなかなかうまくいかない。天文学の世界では、天体現象のつじつま合わせに、二千年もの無駄な時を費やした。地動説に立たず、天動説に立っていたからである。地動説を主張した人々は、ごく少数だったが二千年前にもいた。でも、ほとんどの天文学者たちは、彼らの声に耳を傾けることをしなかった。聖書の研究においても、同じことが起こっている。

では、この「一日」をどのように解釈するのがよいのか。その長さとか、意味はとにかく、「夕があり、朝となった」という句がこの一日に付随しているので、この表現が、通常の「一日」をモデルにしていることは間違いない。問題は、この一日をどのような日として解釈するのかという点にある。少なくとも四つの可能性がある。

第一は、「一日」は 24 時間の一日で、しかも宇宙は書かれている順番どおりに造られた、という解釈である。神は一日目に光を造られた。その 24 時間後の二日目に、大空と地球を造られた。その 24 時間後の三日目に、海と陸を分けられた・・・と記述どおりに読むわけである。ごく普通に読めば、そう解釈するのが最も自然である。4 日目に太陽が造られたと言われると、ちょっと面食らうが、1 日目との差はわずか 3 日間なのだから、目くじら立てることもない、と弁解することもできよう。でも、太陽の無かった三日間を、どのようにして三日間と数えたのかという問題は、依然としてつきまとう。それに、現代科学が明らかにしている宇宙誕生のストーリーとはあまりにかけ離れている。ほとんどの人にとって、認知的不協和は避けられない。現代科学の証拠をすべて否定し、文字どおりに聖書を解釈することが信仰なのだとされると、そのような信仰そのものに懐疑的ならざるを得ない。

第二は、「一日」は神が啓示された日にち、と解釈することである。神は著者に、一日目に光を造られたと啓示された。二日目には、大空と地球を造られたと啓示され、三日目には・・・と、創造のわざのすべてを六日間に分けて啓示された、というのである。こう理解すれば、確かに科学との衝突はなくなる。しかし、聖書本文の中にそのような解釈を暗示するものはない。また、類似した用例を他の聖書箇所に見出すこともできない。仮説として提唱するのは構わないが、確信をもって推奨するのは難しい。

第三は、著者が自分の身の周りを見、著者の考える順番で、創造のわざを記述したという解釈である。著者は、人間の創造を頂点に据えた。そして、その人間の生存に必要なものを一つずつ、六日間にわたる神の創造のわざとして描写した。最初は昼と夜、次は空と地、その次は陸と海、さらに天体、そして動植物から人間へと。この理解では、「一日」は通常の日を指しているのだが、時間の区切りを示す比喩的な意味での「一日」である。

四番目は、神殿(あるいは幕屋)の祭儀において、被造物の一つ一つが神によって確認された「一日」、という解釈である。古代中近東では、毎年神殿において新年祭が行われた。その祭では、神々がそれぞれの被造物の支配権を確認する儀式が行われた。その際の、被造物の支配権の確認は、被造物の創造と理解された。イスラエルにおいても、その種の祭りが神殿において行われた。創世記 1 章は、その祭りの典礼文書だった。すると、祭りの一日目に、光の領域の支配者を確認した、二日目には大空と地との領域の支配者を確認した、三日目には、陸と海との領域の支配者の確認をした、・・・という意味だった。古代中近東とイスラエルの祭りとの違いは、いろいろな神々の分担ではなく、唯一の神がすべてを創造された、ということである。

これら四つの可能性の内、私自身は、三番目と四番目を組み合わせるのが一番よいと考えている。創世記 1 章の著者は、創造の記録を安息日神学に基づいて描写した。従って、著者は、全被造物の創造を六日間に割り振った。従って、「一日」は、比喩的な意味での一日である。

ところで、古代中近東の神殿において毎年行われていた新年祭が、イスラエルにおいても行われていたという証拠はない。従って、この創世記 1 章を新年祭用に用意された典礼文書だったと考えるのは行き過ぎだと思う。そうではなく、毎年新年祭が行われていた文化圏の人々に対し、著者は、彼らの文化的フレームを採用し、「神の物語」を明らかにしたのだと思う。従って、創世記 1 章の「創造」という概念は、古代中近東の世界で一般的だった「被造物の領域の支配権を確認する」ということだった。

ここでちょっと、考えていただきたいことがある。もし神が、宇宙創造のわざを科学的に正確に記すとしたら、いつの時代の科学に合わせればよかったのか、ということである。創世記 1 章の最初の読者だった 3,000 年以上前の古代中近東の宇宙観だろうか。それとも、預言者イザヤの時代の宇宙観だろうか。イエスの時代の一世紀、教父アウグスティヌスの五世紀、中世のスコラ哲学の 13 世紀、近代の科学が勃興してきた啓蒙主義の 18 世紀、それとも現代のビッグバン理論だろうか。もし神が、今の科学に合わせた場合、これから 50 年後、100 年後、1,000 年後の人々は、何というだろうか。

神が、どの時代の科学に合わせて創造を記しても、他の時代の人々からは、科学と矛盾すると指摘されるだろう。聖書と科学が一致するとは原理的にあり得ない。科学は絶えず変化するからである。もしそうであるなら、聖書記者は、時代的な衣を身にまといながらも、いつの時代にも通じる素朴な実体験を基にして描くのがベストだった

ことだろう。否、歴史に実在する人物を聖書記者として用いる限り、それ以外の方法はあり得なかった。

もっとはっきり、具体的に書いてみよう。

神は、今から 3,000 年以上も昔、一人の人物を聖書記者(編者)として選んだ。世界の創造の記録を書かせるためである。その記録の目的は、唯一の神が、この世界のすべてを創造し、支配していることを教えるためだった。その記者も、それを読む最初の読者も、古代中近東の文化圏で生活していた。その文化圏では、「創造」とは、被造物それぞれが、人間の歩みに益するよう、神々によって適切にコントロールされる、ということだった。聖書記者は、そういう文化圏に生きる人々に、被造物のすべては一人の神によって創造された、と宣言したのである。

古代中近東の人々の宇宙像は、時と場所によって異なり、一様ではなかった。しかし、もし最大公約数的な宇宙像を求めるなら、次のようなものだった。

地は、地の基の上に据えられた。その地の基は、何本かの柱の上に置かれていた。地は平らで、陸地と海とに分かれていた。空はお椀を逆さにしたような形の天蓋だった。その天蓋の中央上部には天の神殿があった。またその天蓋の上には、水が覆っていた。そして、時折、天蓋の窓が開かれ、雨が降ってきた。太陽は毎朝、その天蓋の東の方から出て、西の方に向かって移動した。夜の間に地下の通路を通して西から東に移動した。月は、太陽が沈むと出始め、天蓋を少しずつ移動した。星もまた、天蓋に張り付いているかのようにだったが、時折異常な行動をした。それを見て、人々は不吉な予感に襲われた。

神の民イスラエルも、同じような宇宙像をもっていたのか、これについては、学者の間で意見が分かれている。このような宇宙像を暗示するテキストが、詩篇を中心に見られる(これについては、次の旧約聖書の創造論で扱う)。それを文字どおりに解釈すべきか、それとも詩的・比喩的な表現と捉えるべきかについて、喧々譁々の議論が展開されている。どちらを取るにしても、これらの文言が古代中近東特有のものであることに変わりはない。

すると問題は、神が創造のわざを啓示するにあたり、神の民がもっていた宇宙像を変える必要があったかどうかという点に帰着する。もし神が人間に、科学的に正しい宇宙観をもってほしいと望まれたなら、そのことは啓示内容に含まれていたはずである。しかし、神が民に知ることを望まれたのは、「神と世界との関係」であって、宇宙像ではなかった。もしそうだとすれば、神は彼らの宇宙観を修正する必要はなかったということになる。

このことは、歴史の中で生きてきたキリスト者を見れば分かる。いつの時代であっても、キリスト者は、自分の時代の宇宙観で聖書を読んできた。神はそれを許している。古代中近東の時代には古代中近東の、ギリシャ・ローマ時代にはその時代の、中世ヨーロッパの時代には中世の、啓蒙主義時代には啓蒙主義の、近代には近代の、現代には現代の宇宙理解で聖書を読んでいる。それでよいのだ。

神は創世記 1 章で、科学的に正しい宇宙観を啓示されたわけではなかった。当時の宇宙観を背景として、「神と世界との関係」を明らかにされたのだ。詩篇の言葉を文字どおりに解釈しようが、詩的に解釈しようが、古代中近東の宇宙像には変わらない。神の啓示だからといって、科学的に正しい宇宙観を聖書に期待するのは、愚かなことである。

6. 神殿を宇宙支配の拠点として読む

古代中近東の世界では、毎年正月、新年祭が各地の神殿で行われた。それは、神々がその年、宇宙のどの領域を支配するかを確認する祭だった。そのような祭の背景には、神々が神殿を中心に宇宙を支配しているという信仰があった。

古代中近東では、宇宙創造と神殿建設は、しばしば関係づけられている。宇宙創造の結論として、神殿が建てられることもあった。神殿は宇宙のシンボルで、宇宙を反映していた。マルドゥク神が創造を終えると、彼のために神殿が建てられた(「エヌマ・エリシュ」5.113、5.121-24、5.138、6.51-52など)。神殿がないと宇宙には秩序がないと言われ、エリドゥ神殿は建てられた(前 1,600 年頃の「エリドゥ創世記」)。

シュメールでは、神殿は太陽が昇るところに建てられた。「エシャツラ(宇宙の家の意)」とか、「エテメナンキ(天と地の間のプラトホームの意)」などのように、神殿はしばしば、宇宙を表わす名前が付けられた。神殿は宇宙の機能に仕えているとか、天と地を分けるのは神殿である、などとも言われている(シュメールのグデアの神殿建設

の文書「グデア」B.xx.8-11)。

エジプトでは、そこで神が創造を始めたとの伝承に基づき、水が湧き出る場所に神殿が建てられた。また、あるエジプトの神殿は、床は地球上を、天井は空を、円柱と壁は植物を表わすなど、宇宙をモデルに建造された。神殿は、偏在している神が満ちており、宇宙の支配が統括されているところだった(「神殿賛歌」4.80.1)。

20 世紀後半になると、メソポタミアやエジプトの文献学者たちは、イスラエルにも、神殿が宇宙支配の拠点になっていた、と主張するようになった。キリスト教界はこれまで、神殿とは、神がイスラエルの民と共におられることの象徴である、と見なしてきた(Ⅰ列王 6:11-14, 8:13-14)。しかし彼らは、それよりさらに一歩進め、聖書の神は、神殿から宇宙を支配するため、神殿建設を命じた、と主張し始めたのである。表現は微妙な違いに過ぎないが、もたらす結果は、大変大きなものである。

もし聖書から、「神殿イコール宇宙支配の拠点」という考えを明らかにすることができるなら、キリスト者の神理解や宇宙理解は大きく変わってくる。キリストが受肉されたことも(ヨハネ 1:14)、キリスト者が「聖霊の宮」であることも(Ⅰコリント 6:19)、全く違った響きを帯びてくる。より豊かで、深まったものになる。

世界創造の記録は、安息日神学に基づいて記された。神は、六日間で創造のわざを完成し、七日目は休まれた。ほとんどのキリスト者は、この神の休みを、七日目には働かず何もしなかった、と読んでいる。一生懸命働いたご褒美の休み、というところだろうか。六日間の創造は大切だが、七日目はおまけみたいなものでさしたる意味はない、そんな受け取り方である。

だが、このような読み方は、根本的に間違っている。「七日目」という言葉は、2 章 1-3 節に三回出てくる。聖とされ、祝福されたのは、七日目だけである。確かに、六日目の人間は、被造物のゴールだった。しかし七日目は、全創造の最終ゴールであり、主役は神ご自身だった。

キリスト教界が、この七日目の重要性に気づかなかったのは、「休む」という言葉を正しく理解できなかったことにある。では、「休む(安息する)」とは、どのような意味なのか。

創世記 2 章 2 節の「休む(シャバット)」は「終わる」という意味で、それまで従事していたことが完成したことを指す(ヨシュア記 5:12 では「やみ」、ヨブ 32:1 では「やめた」と訳されている)。それは、ものごとが新しい段階に入ったことを暗示する。出エジプト記 31:17 は、「主が六日間に天と地とを造り、七日目に休み、いこわれた」と述べている。ここでは、「いこわれた(イナファッシュ)」という言葉が、「休み(シャバット)」に続いている。この二つの言葉は補完的な使用例で、同じことを指している。この「イナファッシュ」は、安全、保護、強固な状態に入ることを意味する。神は、創造の大変なわざを終わり、新しい働きに整えられた状態で過ごしている、ということだ。

詩篇 132 篇 7-8 節と 13-14 節は、神が安全で守られている状態で何をしているのかを明らかにしている。まず、7-8 節をお開きいただきたい。

さあ、主の住まいに行き、主の足台のもとにひれ伏そう。主よ。立ち上がってください。あなたの安息の場所に、お入りください。あなたと、あなたの御力の箱も。(詩篇 132:7-8)

ここでは、「住まい(ミシュフノート)」が「安息の場所(メヌーアッハ)」と平行句である。さらに、「足台(ハドーム・ラグライフ)」と「御力の箱(アローン・ウゼー)」とが、平行句になっている。ここで「主の住まい」とは、神殿のことである。その神殿が「安息の場所」と言い変えられている。「安息(メヌーアッハ)」という言葉は、「憩う(イナファッシュ)」と同根の言葉である。それは、安全に保護され、憩いの状態の中で働いている姿を表わす。それは、六日間の創造の働きとは全く種類の違う状態にあることを指した表現である。激しい動きを見せた創造とは違い、すべてを平静に支配しておられる新しい働きを示唆している。そのような神の働きが、神殿においてなされているのだ。

足台とは、神が働いている世界を指す。その足台は、「御力の箱(契約の箱)」と同義として描かれている。契約の箱は、神殿の至聖所に安置されていた。この世界は至聖所と同一視されているのだ。

続く 13-14 節にも、同じことが繰り返されている。

主はシオンを選び、それをご自分の住みかとして望まれた。「これはとこしえに、わたしの安息の場所、ここにわたしは住もう。わたしがそれを望んだから。(詩篇 132:13-14)

ここでは、神が「シオンを選び、それをご自分の住みか」としたこと(13 節)と、「わたしの安息の場所、ここにわた

しは住もう」(14 節)とは、平行関係にある。とすれば、ここでも神殿と安息の場所は同一視されている。つまり、神が神殿に住んで王座に就いていることと、安息の場所にいることとは、同じことである。すると、七日目に安息されたことは、神殿で王座に就いて御業を行われていることに他ならない。

この「安息」という言葉は眠っているという意味ではない。通常的生活状態を指していることは、次の民に対する神の約束にはっきり表されている。

あなたがたは、ヨルダンを渡り、あなたがたの神、主があなたがたに受け継がせようとしておられる地に住み、主があなたがたの回りの敵をことごとく取り除いてあなたがたを休ませ、あなたがたが安らかに住むようになるなら(申命 12:10)

神はイスラエルの民に、約束の地において「回りの敵をことごとく取り除いて休ませる」と語られた。「敵をことごとく取り除く」と、民は自由に往来ができ、収穫の喜びを味わい、生活を楽しむことができる。「あなたがたを休ませ」は、「あなたがたが安らかに住むようになる」と言い換えられている。ここでも、「休ませる」とは、眠っている状態を指すのではなく、「安らかに住むようになる」という意味である。イスラエルの民は、カナンで、何もしないでぼおっと過ごすのではない。平和と祝福に溢れた日常生活を約束されたのである。

次のヨシュア記の言葉もまた、イスラエルの民の「安住」について言及している。

主は、彼らの先祖たちに誓ったように、周囲の者から守って、彼らに安住を許された。すべての敵の中で、ひとりも彼らの前に立ちだかる者はいなかった。主はすべての敵を彼らの手に渡された。(ヨシュア 21:44)

今すでに、あなたがたの神、主は、あなたがたの同胞に約束したように、彼らに安住を許された。今、主のしもべモーセがあなたがたに与えたヨルダン川の向こう側の所有地、あなたがたの天幕に引き返して行きなさい。(ヨシュア 22:4)

両方の箇所とも、「安住を許される」という表現が出てくる。この箇所の「安住」の中身を考えていただきたい。カナンは、かつては先祖たちが住んでいた土地とはいえ、外国の地である。イスラエルはそこを侵略していくのであり、敵に囲まれ、困難な状況に出くわすのは当たり前である。そういう状況の中で、神は、敵をイスラエルに与え、平和な国家形成を約束された。それが「安住を許される」という言葉の中身だった。

敵に囲まれた真ただ中で、神から約束された平和で祝福に満ちた歩みを送る、これが約束の地におけるイスラエルの姿である。このような「安住」のイメージを、神の七日目の「休み」について当てはめてみたらどのようなのだろうか。皆さんに、ぜひ考え直していただきたい。

さらに話を進めることにしよう。我々は今、神殿を宇宙支配の根拠地に見立ててよいのか、というテーマを追いかけている。次のイザヤ書の言葉は、そのことを暗示する大切な御言葉である。

天はわたしの王座、地はわたしの足台。わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか。わたしのいこいの場は、いったいどこにあるのか。これらすべては、わたしの手が造ったもの。これらすべてはわたしのものだ(イザヤ 66:1-2)。

ここで神は、まず、「天はわたしの王座、地はわたしの足台」と述べている。「天はわたしの王座」とは、神が天から支配している、という意味である。「足台」は、神が統治している場所である。「地はわたしの足台」とは、神の支配の対象が地であることを述べている。この二つの句は、神が宇宙の支配者であると宣言している。

次に神は、「わたしのために、あなたがたの建てる家は、いったいどこにあるのか」と、神殿に言及する。そしてその神殿が、「わたしのいこいの場」と、言い直される。神殿は、神が王座に就いて支配を執行する場所である。それがここでは、神が憩われる場所、と説明されている。神にとって、「支配する」とことと「いこい」ことは同じだった。人間にとっては、全く相反することなのだが、神にとっては全く違う。「いったいどこにあるのか」とは、地上の神殿は、神の住まいとしては小さすぎて(Ⅰ列王記 8:27、Ⅱ歴代 2:6、6:18)、神の前には存在感が全くないことを、示唆する。

そして最後に神は、「これらすべては、わたしの手が造ったもの。これらすべてはわたしのものだ」と述べる。「これらすべては、わたしの手が造ったもの」とは、被造物すべてを指す。「これらすべてはわたしのものだ」とは、創造された宇宙のすべてが神の支配下にある、との宣言である。このイザヤの言葉は、神の支配、神殿、宇宙の三

つを一つのこととして、はっきり述べている。

このイザヤの言葉は、とても重要なものだった。従って、ステパノも、ユダヤ議會を前に、この言葉を引用している(使徒 7:49)。神は天の聖所から、我々一人一人への燃えるような愛をもって見ておられる(申命記 26:15、イザヤ 63:15)。この地は、神が働かれる「神の足台」である(詩篇 99:5、I 歴代誌 28:2、マタイ 5:35)。イザヤ書 60 章 13 節は、聖所を「神の足台」と呼んだ。神殿とは、神の統治のシンボルだった。

ところで、創世記 2 章 1-3 節では、七日目が終わったとは告げられていない。紀元前 2 世紀のユダヤ人アリストブロスは、「七日目は終わっていない、神の休みは今も続いている」と述べている。出エジプト記 31 章 17 節は、七日目が「永遠に」続くことを暗示している。

ヨハネの福音書 5 章 17 節においてイエスは、「わたしの父は今に至るまで働いておられます。ですからわたしも働いているのです」と、述べている。「今に至るまで」の始まりは、創世記 2 章の七日目を指すと思われる。神は、創造のわざを終え、七日目の安息に入られた。しかしイエスによれば、神はその時以来ずっと、働き続けておられる。イエスは、その神の働きを見ながら、安息日に病人を癒された。神にとっても、イエスにとっても、安息日は、何もせずに休んでいる日ではなかった。神の恵みと祝福を広げ続けていく働きを展開している。

被造物は、創造されたらそれで終わり、というわけではない。地上の植物、太陽、空の鳥や海の魚、動物、人間など被造物それぞれは、自分の役目を果たすために動いている。神はそれらに何の働きかけもせず、休んでいるだけなのか。そんなことはない。神殿から、新しい被造物支配を始めたのである。コンピュータをセットアップしたとする。本体や画面、キーボード、プリンターをつないだら、それで終わりというわけではない。そこから新たな仕事が始まる。それと同じように、六日間の創造のわざが終わり、七日目の被造物の支配・管理のわざが新たに始まる。それが、七日目の休むという内容だったのである。

II. 旧約聖書における創造記述

創世記 1 章が世界創造に関する最高の文書であることは論を待たない。しかし神は、他にもたくさんの創造記述をいろいろな聖書箇所に残された。キリスト者は、啓示の一部を学ぶだけで、そのテーマに関する神の御心がすべて分かった、と考えてはならない。もし他の箇所でも啓示されたとすれば、一つ一つ丁寧に取り上げ、真摯に学ぶ必要がある。そうすることによって、そのテーマを、いろいろな角度から、奥深く学ぶことができる。この講演では、旧約聖書から新約聖書へと、話を進めていく。その際、創世記 1 章との関わりを大切にしながら取り上げる。

創造のすばらしさを歌った詩が、詩篇にはたくさん出てくる。特に、詩篇 8 篇、19 篇、24 篇、33 篇、74 篇、104 篇、136 篇などは、その代表的なものである。一つ一つの詩篇を、丁寧に取り上げていくことにしよう。

1. 詩篇 8 篇(人は被造物の管理を委ねられている)

人とはいったい何者なのか、そう問いかけた人物が 3 人いる。まず、苦悩の中で自らを振り返ったヨブである(ヨブ 7:17)。次に、敵に囲まれ、助けを求めた詩人である(詩篇 144:3)。三番目は、夜空を見上げ、哲学的な問いを發した本詩篇の著者である。彼は、広大な宇宙を見上げ、人間について考える。人は、神の恵みを受けているというものの、いかに小さな者であるかを告白する。

あなたの指のわざである天を見、あなたが整えられた月や星を見ますのに、(3 節)

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。(4 節)

あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。(5 節)

あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。(6 節)

すべて、羊も牛も、また、野の獣も、(7 節)

空の鳥、海の魚、海路を通うものも。(8 節)

私たちの主、主よ。あなたの御名は全地にわたり、なんと力強いことでしょう。(9 節)

3 節の「あなたの指のわざである天を見」と、「あなたが整えられた月や星を見ますのに」は、ヘブル詩の平行法である。「あなたの指のわざ」と「あなたが整えられた」が対応し、「天」と「月や星」が対応している。天は、創世記 1

章の二日目の創造、月や星は四日目の創造への言及である。

4 節で詩人は、一転して人間に目を向ける。そして、「人を、神よりいづらか劣るものとし」と述べる。これは、六日目に、人が「神のかたち」に造られたことへの言及である。5 節の「これに栄光と誉れの冠をかぶらせました」と、6 節前半の「あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ」、及び 6 節後半の「万物を彼の足の下に置かれました」の三つは三連句である。これは、人間に与えられた「支配せよ」(創世 1:26)に関連する。

7 節の「すべて、羊も牛も、また、野の獣も」は、六日目の動物の創造、8 節の「空の鳥、海の魚、海路を通うもの」は、五日目の創造に関係する。この二つはヘブル詩の平行句で、人間が支配する対象を指している。

詩篇 8 篇は、とても興味深い詩篇である。詩人は、夜空に輝く月や星を見ながら、人間とは何者かと問う。彼は、人間が「神よりいづらか劣るものとして」造られたことを述べる。そして、神より被造物の管理を委ねられたことを思いを巡らし、「人とは、何者なのでしょう」と叫んだ。このような流れは、この詩が創世記 1 章を背景にしてつくられたことを示唆する。

2. 詩篇 19 篇 1-6 節(太陽は神の創造の栄光を語っている)

詩篇 19 篇は、前半と後半で内容が異なっている。前半の 1-6 節は、大空に輝く太陽が、全地に神の栄光を告げていると歌っている。前の 8 篇が、夜空に輝く月や星を歌い、人間に目をとめているのと対照的である。

天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。(1 節)

昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す。(2 節)

話もなく、ことばもなく、その声も聞かれぬ。(3 節)

しかし、その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた。神はそこに、太陽のために、幕屋を設けられた。(4 節)

太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る。(5 節)

その上るのは、天の果てから、行き巡るのは、天の果て果てまで。その熱を、免れるものは何もない。(6 節)

まず、全体としての流れを把握しておこう。1 節は、ヘブル詩の平行法が見られる。天と大空、神の栄光と御手のわざ、語り告げと告げ知らせるが、それぞれ対応している。詩人はここで、天や大空が神の創造のすばらしさを物語っている、と述べている。

2 節の「昼は昼へ、話を伝え、夜は夜へ、知識を示す」とは、天と大空は、昼間も夜も神の存在と栄光を宣言している、という意味である。むろん、それは単なる天や大空に過ぎない。それらがしゃべることはない。従って詩人は、「話もなく、ことばもなく、その声も聞かれぬ」(3 節)と歌う。

ところが、4 節になると、「その呼び声は全地に響き渡り、そのことばは、地の果てまで届いた」と、正反対のことを宣言する。一言の言葉も声もないと言ったばかりなのに、今度は「全地」そして「地の果てまで」、声が響き渡っているという。なぜ、そんなことが起こるのか。太陽の存在である。詩人は、「太陽のために、幕屋を設けられた」と述べている。これはむろん、創世記 1 章の四日目の太陽の創造を指している。「幕屋を設けられた」は、定住の場所をもっているとの、詩的表現である。

詩人は、5 節から 6 節にかけ、「太陽は、部屋から出て来る花婿のようだ。勇士のように、その走路を喜び走る」と、太陽が全天を駆け巡るようすを歌っている。部屋とは前節の幕屋のことである。ここで太陽は、花婿、そして勇士に例えられている。前者は喜びの代表者、後者は力強さの代表者である。昼間太陽の照ることが、人間にとつてどれほど喜びに満ちたものであり、生きる力を与えるものかを、巧みに歌い上げている。

そして、6 節の最後「その熱を、免れるものは何もない」は、この天の下に生きる者すべてに、神の恵みが注がれていることの強烈な表現である。

古代中近東に生きる人々は、太陽の恵みをよく知っていた。適度な雨と太陽、この両者がなければ生存は文字どおり不可能だった。だから彼らは、太陽をシャメシュ神としてあがめ、怒らせまいと心砕いていた。ところが、この詩篇は、そういう文化圏の中で生きている人々に対し、強烈なメッセージを送っている。太陽は創造者なる神の恵みを告げるもので、神ではない。それは歓喜をもって迎えるべき存在であり、少しも恐れるようなものではない。

3. 詩篇 24 篇(この世界は神殿になぞらえられている)

詩篇 24 篇は、旧約聖書の中でも特異な詩である。1-2 節は世界を創造された神を賛美しているのに、3 節以降

は神殿に関わることが歌われている。長い間、この両者の関係が分からず、旧約学者たちを悩ませてきた。しかし我々は、この問題を解決するヒントを手に出している。まずは、本文をゆっくり読むことから始めよう。

地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。(1 節)

まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。(2 節)

だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。(3 節)

手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。(4 節)

その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。(5 節)

これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。(6 節)

門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。(7 節)

栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。(8 節)

門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。(9 節)

その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。(10 節)

この詩篇は、三つに分けられる。

まず 1-2 節で、世界の創造に関して歌われている。1 節の「地とそれに満ちているもの」と「世界とその中に住むもの」は、平行句である。2 節の「海に地の基を据え」と「もろもろの川の上に、それを築き上げられた」も、平行句である。しかも、1 節は万物を指し、2 節は万物の基礎を述べ、2 行連句を構成している。加えて、「地と世界—主、主—海と川」という、キアスミス構文になっている。

1 節は、創世記 1 章の記録では六日間全体にわたる創造、2 節は、三日目の海と陸の創造に関係する。「地の基」という表現は、詩篇 102:25 の「あなたははるか以前に地の基を据えられました。天も、あなたの御手のわざです」(この箇所は、ヘブル 1 章 10 節において引用されている)を始め、「主は知恵をもって地の基を定め、英知をもって天を堅く立てられた」(箴言 3:19)、「天を張り、地の基を定め、人の霊をその中に造られた方」(ゼカリヤ 12:1)など、旧約聖書には頻繁に出てくる。人が住んでいるこの地は、堅固な土台の上に建てられているという建築用語で、詩的表現である。

二番目は 3-6 節で、神殿詣でをする人たちについて歌われている。しかも、その内容と形式は、神殿に入る際の儀式文の中で語られたことを示唆する(詩篇 15 篇参照)。シオンの山の入り口で、巡礼者たち(その代表かもしれない)が「だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか」(3 節)と質問する。すると祭司が、「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」(4-5 節)と答える。すると、巡礼者のグループの代表者が「これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである」(6 節)と応答する。

三番目は 7-10 節で、神殿の入り口における儀式文である。まず、契約の箱を担ぐ祭司が「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる」(7 節)と宣言する。すると、神殿の中から門番が、「栄光の王とは、だれか」(8 節前半)と尋ねる。再び祭司が、「強く、力ある主。戦いに力ある主。門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる」(8 節後半と 9 節)と答える。再度門番が、「その栄光の王とはだれか」(10 節前半)と確認する。「万軍の主。これぞ、栄光の王」(10 節)と、祭司が三度目の宣言をする。

古代中近東の世界では、新年祭を始めいろいろな場面で、この種の儀式文による「掛け合いの問答」が行われた。しかし、イスラエルの民の間で、二番目と三番目のような問答が実際に行われたかどうかは、定かではない。サムエル記第二 6 章 12-19 節には、神殿建設以前のダビデ時代のことはあるが、類似した出来事が起こっている。近隣のメソポタミア文化圏のように、年に一度の神殿における王の即位式のような儀式が、イスラエルにもあったとは思えない。しかし、エルサレムにおける祭りを詣でる巡礼者たちによって、あるいは祭司たちによる神殿の儀式において、詩篇 24 篇のような問答が公唱された想定するのは、とても自然なことである。

古代中近東では、新年に行われる王の即位式によって、それぞれの王のその年の支配権が確立した。イスラエルにおいては、そのような新年祭は必要なかった。唯一の神が全被造物の創造者であり、支配者であることは、信仰の基幹に属することだったからである。彼らは、この 24 篇の 1-2 節に歌われているように、この宇宙が唯一の神の支配に属することを、三大祭の時も、また毎日の礼拝儀式の中でも、確認し続けた。このように理解すれば、この 24 篇は一貫した詩篇となり、「24 篇の統一性」に関する長い間の疑問も解決する。

4. 詩篇 33 篇 4-9 節(神はみことばによってこの世界を造られた)

イスラエルの民は、礼拝においてさまざまな賛美を神にささげた。詩篇 33 篇は、その一つである。1-3 節が序文で賛美への呼びかけ、20-22 節が信仰の告白で結文である。その間に、主の言葉(4-9 節)、主の計画(10-12 節)、主の目と力(13-19 節)が歌われている。本講演では、創造が神のことばによってなされたことを伝える 4-9 節の部分のみ扱う。

まことに、主のことばは正しく、そのわざはことごとく真実である。(4 節)

主は正義と公正を愛される。地は主の恵みに満ちている。(5 節)

主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。(6 節)

主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる。(7 節)

全地よ。主を恐れよ。世界に住む者よ。みな、主の前におののけ。(8 節)

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。(9 節)

主は国々のはかりごとを無効にし、国々の民の計画をむなしくされる。(10 節)

主のはかりごととはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る。(11 節)

33 篇のこの箇所は、神のことばの權威について歌っている。4-5 節は、現在の世界が神のことばによって統括されているようすが描写されている。そして、6 節から 9 節にかけ、神のことばが神の創造のわざに深く関わっていたことを述べている。6 節の「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって」という表現は、全被造物が神のことば、神の息吹によって創造されたことを述べている。

7 節の「主は海の水をせきのように集め、深い水を倉に収められる」は、創世記 1 章でいえば、万物の創造の「素材になった大水」(2 節)ではなく、三日目の「海」の創造(10 節)と関係する。9 節の「まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ」は、創世記 1 章の「神が仰せになった。すると、そのとおりになった」という一連の句を思い出させる。

10-11 節は、創造時の出来事というより、基本的には、現在から未来のことが展望されている。11 節の「主のはかりごととはとこしえに立ち、御心の計画は代々に至る」という文章は、創世記 1 章の「神はよしとされた」という言葉にも通じる。イスラエルの民が神のことばを大切に、賛美するのは、万物が神のことばによって創造されたからである。その神のことばは、永遠の「主のはかりごと」であり、「御心の計画」(11 節)である。被造物のすばらしさは、神の御心を明らかにしていることにある。神の民は、被造物自体を賛美するのではない。被造物が示す神ご自身の御心、ご計画を賛美するのである。

5. 詩篇 74 篇 13-17 節(神が海や天体を創造されたことを宣言している)

詩篇 74 篇は、国家の不幸を嘆く国民的な歌である。この詩は、動詞の時制によって、次のようなキアスムス構文を構成している。

A 命令(2-3 節)

B 完了(4-9 節)

C 未完了(10-11 節)

B' 完了(12-17 節)

A' 命令(18-23 節)

この中の「B' 完了」の部分に注目しよう。詩人は 12 節において、「神は、昔から私の王」と告白する。そして 13 節から 17 節において、その神がこの世界の創造者であることを歌っている。

あなたは、御力をもって海を分け、海の巨獣の頭を砕かれました。(13 節)

あなたは、レビヤタンの頭を打ち砕き、荒野の民のえじきとされました(14 節)。

あなたは泉と谷を切り開き、絶えず流れる川をからされました。(15 節)

昼はあなたのもの、夜もまたあなたのもの。あなたは月と太陽とを備えられました。(16 節)

あなたは地のすべての境を定め、夏と冬とを造られました。(17 節)

13 節と 14 節は、ヘブル詩の平行法で、「海を分ける—巨獣の頭を砕く、レビヤタンの頭を砕く—荒野のえじきにする」と、キアスムス構文を構成している。海を分けるとか、荒野で民に食物を与えるという描写は、出エジプトの

出来事を思い出させる。それも、背景にあったらう。しかし、続く15-17節より、「海を分け」は創世記1章の三日目の創造、「海の巨獣」は五日目の創造と関連づけて読む方が自然かもしれない。

海の巨獣とかレビヤタンは、古代中近東の文献では「神々に反逆する者として、七つの頭をもつ蛇のようなレビヤタン」と言われている。詩人は、その頭を神が打ち砕かれたと二度も繰り返し、それを人々の餌食として与えたと詳述する。このような描写は、レビヤタンの存在に脅かされていた古代中近東の人々に対し、決定的な挑戦状になった(ヨブ 3:8、41:3、詩篇 104:26 参照)。

その日、主は、鋭い大きな強い剣で、逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタンを罰し、海にいる竜を殺される。(イザヤ 27:1)

さめよ。さめよ。力をまといえ。主の御腕よ。さめよ。昔の日、いにしえの代のように。ラハブを切り刻み、竜を刺し殺したのは、あなたではないか。(イザヤ 51:9)

15-17節は、神が世界を創造し、支配していることに言及している。15節は、神が、泉、谷、川を支配していることを述べている。これは創世記1章の三日目、「陸の創造」と関連する。16節には「昼一夜、月一太陽」のキアスムス構造が見られるが、これは四日目の「天体の創造」にあたる。古代中近東においては、太陽や月は代表的な神々として祭られていたが、ここでは神の主権のもとにあることが強調されている。17節の「地のすべての境を定め」は、三日目の創造への言及である。「夏と冬とを造られました」は、四日目の「季節のため」に関係する。

詩篇 74 篇の 1-11 節、および 18-23 節は、苦境の真ただ中に置かれ、神の救いを呼び求めている神の民の姿を伝えている。周囲の国家がイスラエルを攻撃し、神の民は存亡の危機にさらされていた。そういう状況の中で歌われた74篇は、古代中近東の宗教に対する厳しい挑戦状だった。しかも詩人は、神を「地上のただ中で、救いのわざを行われる方」(12節)と宣言し、その神を「昔からの私の王」と、一人称単数形で告白した。これこそ、現代のキリスト者へのメッセージである。

6. 詩篇 104 篇(神はすべての被造物を喜んでいる)

詩篇 104 篇は、この世界の創造を歌った詩篇である。一見すると、創世記1章とは全く似ていない。しかし実際には、意外な類似点が浮かび上がってくる。ほとんどの詩篇研究家は、両者の依存関係には否定的である。しかし、この詩篇は、創世記1章の解釈には不可欠である。両者とも古代中近東の共通の文化的背景をもっているからである。

聖書研究の奥義は、聖書そのものを繰り返し読むことにある。註解書や辞典、説教集や解説書などは役立つ。だが、その種の書物は、我々を著者の気持ちに導くものではない。著者の気持ちになるには、聖書を暗記するほど、繰り返し読むことである。詩篇 104 篇は、長さでは創世記1章とほとんど変わらない。ただ、詩であるため、七日間にまとめるような描き方はしていない。しかも、詩篇の中でも後の方にあり、目立つこともない。だから、創世記1章ほど有名ではない。だが、創世記1章の理解に欠かすことはできない。

わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方。あなたは尊厳と威光を身にまといおられます。(1節)

あなたは光を衣のように着、天を、幕のように広げておられます。(2節)

水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます。(3節)

風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます。(4節)

また地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません。(5節)

あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていました。(6節)

水は、あなたに叱られて逃げ、あなたの雷の声で急ぎ去りました。(7節)

山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと。(8節)

あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました。(9節)

主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、(10節)

野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渴きをいやします。(11節)

そのかわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています。(12節)

主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわざの実によって満ち足りています。(13節)

主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために。(14 節)
また、人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも。(15 節)

主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も。(16 節)

そこに、鳥は巢をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています。(17 節)

高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場。(18 節)

主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています。(19 節)

あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。(20 節)

若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます。(21 節)

日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります。(22 節)

人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます。(23 節)

主よ。あなたのみわざはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています。(24 節)

そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。(25 節)

そこを船が通い、あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます。(26 節)

彼らはみな、あなたを待ち望んでいます。あなたが時にしたがって食物をお与えになることを。(27 節)

あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります。(28 節)

あなたが御顔を隠されると、彼らはおじ惑い、彼らの息を取り去られると、彼らは死に、おのれのちに帰ります。(29 節)

あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます。(30 節)

主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわざを喜ばれますように。(31 節)

主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます。(32 節)

私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう。(33 節)

私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう。(34 節)

罪人らが地から絶え果て、悪者どもが、もはやいなくなりますように。わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ。(35 節)

この詩篇は、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。わが神、主よ。あなたはまことに偉大な方」という語り出しで始まり、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。ハレルヤ」で終わる。詩人は、さまざまな被造物を観察しながら、神を賛美する。これは聖書全巻を貫いている信仰である。

詩は詩である。詩の感動は、そこで留めて置く方がよい。変に研究の対象にすると、著者の意図や気持ちを逆なですることになる。そんな野暮なことはしたくない。詩集を読んで、歴史的、科学的な分析をするのは愚かである。だが、聖書は神のことばでもある。神が詩人をとおして何を語ろうとしているのか、それが創世記 1 章の創造記録とどのような関係にあるのか、その辺を明らかにしたい。

創世記 1 章は、安息日神学に基づいて神の創造を記述している。それに対し詩篇 104 篇は、日にちの区切りはなく、著者の目に映るがままの被造物について歌っている。だが、とても不思議なことに、全体として創世記 1 章の創造の流れを追いかけるような歌い方をしている。共通の文化圏と信仰に基づいていたからである。

まず、1 節後半から 2 節前半までに「あなたは尊厳と威光を身にまとおられます。あなたは光を衣のように着」と歌われている。これは創世記 1 章で言えば、一日目の「光」の創造に関連する。先週の講演では、この箇所を基に、創世記 1 章の「光」は四日目の太陽や月のような物理的な光ではなく、神の栄光と結びついたより象徴的な光である、と解説した。

2 節の「天を、幕のように広げておられます」、3 節の「水の中にご自分の高殿の梁を置き、雲をご自分の車とし、風の翼に乗って歩かれます」、4 節の「風をご自分の使いとし、焼き尽くす火をご自分の召使いとされます」などの描写は、二日目の「大空」に関係する。すべてがぴったりのわけにはいかないが、幾つかの類似点が見られることに驚かされる。ご自分で確認していただきたい。

5 節の「地をその基の上に据えられました。地はそれゆえ、とこしえにゆるぎません」は、三日目の「陸地」の創造と関係する。6 節の「あなたは、深い水を衣のようにして、地をおおわれました。水は、山々の上にとどまっていまし

た」は、「海」の創造と関係がある。7節の「水は、あなたに叱られて逃げ」は、創世記1章の「神が仰せられた」に関係がある。続く、「あなたの雷の声で急ぎ去りました」は、「そのようになった」に関係する。

8節の「山は上がり、谷は沈みました。あなたが定めたその場所へと」、さらに9節の「あなたは境を定め、水がそれを越えないようにされました。水が再び地をおおうことのないようにされました」は、三日目の「海と陸を分けた創造」に対応する。詩人は、①神がより細かなところまでを配慮していること、②神が直接被造物に指示を出していること、③創造より摂理の働きを強調していること、の三点において、創世記の著者より詳しい。

10-11節の「主は泉を谷に送り、山々の間を流れさせ、野のすべての獣に飲ませられます。野ろばも渴きをいやします」や、13節の「主はその高殿から山々に水を注ぎ、地はあなたのみわぎの実によって満ち足りています」、14節の「主は家畜のために草を、また、人に役立つ植物を生えさせられます。人が地から食物を得るために」、15節の「人の心を喜ばせるぶどう酒をも。油によるよりも顔をつややかにするために。また、人の心をささえる食物をも」、16節の「主の木々は満ち足りています。主の植えたレバノンの杉の木も」、18節の「高い山は野やぎのため、岩は岩だぬきの隠れ場」、32節の「主が地に目を注がれると、地は震え、山々に触れられると、山々は煙を上げます」などはいずれも、三日目の「土地」の創造と関係がある。詩人は、身の回りを観察しながらこの歌を歌っているため、このように「土地」に関わりのある部分に多くの言葉を割いている。

12節の「そのかたわらには空の鳥が住み、枝の間でさえずっています」、17節の「そこに、鳥は巢をかけ、こうのとりは、もみの木をその宿としています」などは、五日目に創造された「空の鳥」への言及である。自然の美しさや細やかな描写は、読む者の心を慰める。

19節の「主は季節のために月を造られました。太陽はその沈む所を知っています」、22節の「日が上ると、彼らは退いて、自分のねぐらに横になります」とか、23節の「人はおのれの仕事に出て行き、夕暮れまでその働きにつきます」などは、太陽が支配する昼のようすをリアルに描いている。それに対し、20-21節の「あなたがやみを定められると、夜になります。夜には、あらゆる森の獣が動きます。若い獅子はおのれのえじきのためにほえたけり、神におのれの食物を求めます」は、夜の状態について述べている。いずれも、創世記1章の四日目の天体の創造と関係がある。

24節の「主よ。あなたのみわぎはなんと多いことでしょう。あなたは、それらをみな、知恵をもって造っておられます。地はあなたの造られたもので満ちています」は、神への賛美であるが、創世記1章の「神はよしとされた」というみ言葉を思い出させる。

25-26節の「そこには大きく、広く広がる海があり、その中で、はうものは数知れず、大小の生き物もいます。…あなたが造られたレビヤタンも、そこで戯れます」という海の光景は、創世記1章の「海の生き物」の創造(五日目)に関係する。古代中近東の人々にとっては、海は恐ろしいものだった。「レビヤタン」は神々に反逆するもので、その代表的なものだった。詩人は、そのような人々に向かい、海は広く平安なもので恐れを感じることはない、とのメッセージを送っている。

27-30節は、六日目の創造記録に匹敵する。27節の「あなたが時にしたがって食物をお与えになる」、28節の「あなたがお与えになると、彼らは集め、あなたが御手を開かれると、彼らは良いもので満ち足ります」は、創世記1章の六日目に「動物に食物を与えたこと」と関係がありそう。ただし、29節の「ちり」とか、30節の「あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。また、あなたは地の面を新しくされます」は、人間に対する食物供与(創世1:29)に関係するようにも見える。この箇所「御霊」は、創造の一日がはじまる前の状態(創世1:2)、あるいは人間の創造(創世2:7)に関係がありそうである。

31節の「主の栄光が、とこしえにありますように。主がそのみわぎを喜ばれますように」は、詩人がこれまでの一連の被造物の創造を振り返って叫んだ言葉である。原文では、「そうであつたらいいなあ」という願望を込めた祈りではなく、「神は喜んでおられます」という高らかな宣言である。この宣言は、六日間の創造を終えた神が、造られたすべてのものをご覧になって「よしとされた」ことに通じている。

この詩篇は、一人称の賛美で始まった(1節)。途中一人称は出てこない。ところが、最後になって再び一人称

の賛美に戻る(33-35 節)。33 節の「私は生きているかぎり、主に歌い、いのちのあるかぎり、私の神にほめ歌を歌いましょう」、34 節の「私の心の思いが神のみこころにかないますように。私自身は、主を喜びましょう」、35 節の「わがたましいよ。主をほめたたえよ」は、三連句の神への賛美である。神の創造のわざを観察しながら、被造物に思いをめぐらすことは、神を賛美することに他ならない。

創世記 1 章では、神の創造のわざを物語的に伝えている。そこから我々は、神と被造物の関係を知ることができる。ところがこの詩篇 104 篇は、被造物を支配している神をほめたたえている。神を知ること、神を賛美することと同じである。創造と摂理の奥義は、神への高らかな賛美を生み出す。賛美に至らない創造理解は、聖書の信仰ではない。

7. 詩篇 136 篇 4-9 節(創造は神の永遠の恵みを伝えている)

詩篇 136 篇は、神が、宇宙創造以降、全被造物及び神の民の歴史に対し、どのように関わってきたかを歌っている。それは、「その恵みはとこしえまで」という言葉に、すべてが込められている。神の恵みが全被造物に、しかも永遠に、注がれている。この事実こそ、詩人が本詩篇全体を通じて訴えたいことだった。本講演では、この詩篇の 4-9 節の創造に関する部分にのみを取り上げよう。

ただひとり、大いなる不思議を行われる方に。その恵みはとこしえまで(4 節)

英知をもって天を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(5 節)

地を水の上に敷かれた方に。その恵みはとこしえまで。(6 節)

大いなる光を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(7 節)

昼を治める太陽を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(8 節)

夜を治める月と星を造られた方に。その恵みはとこしえまで。(9 節)

この詩篇 136 篇の 1-3 節では、神が神であることを黙想するとき、神の恵みが全被造物に、永遠に注がれていることを確認できる、と歌われている。続けて、4-9 節では神が創造された全被造物に目をとめるとき、10-15 節では神が出エジプトの際に行われた奇跡的な御業を思い出すとき、16-22 節では神が荒野からカナン定着までになされた御業を振り返るとき、そして最後の 23-26 節では神がそれぞれ個人の歩みにおいて救いの御手を延ばされた経験に思いをめぐらすとき、神の永遠の恵みを確認できる、と歌われている。

4 節の「大いなる不思議」は、5 節以下の事柄を指し、創造の御業のことである。5 節の「英知をもって天を造られた」は、二日目の「大空の創造」と関係がある。6 節の「地を水の上に敷かれた」は、三日目の「土地の創造」に関係する。7 節の「大いなる光を造られた」は、一日目の「光の創造」に関係がありそうだが、次節の「昼を治める太陽を造られた」と平行句に読む方が自然である。すると、9 節の「夜を治める月と星を造られた」を含め、7-9 節は四日目の太陽、月、星の創造に関係していると理解するのがよい。

結局これらのテキストによれば、二日目から四日目の創造を実現した神を深く心にとめるなら、神の恵みが全被造物に永遠に注がれていることが分かるはずである。もしキリスト者が、この詩篇が述べていることを真正面から受け止めるなら、その歩みは全く変わってくるだろう。被造物管理の神学などと大上段に振りかざさなくても、この詩篇に身を沈めて生きるとき、その神学の実践者ということになる。そのような生き方を送っていただくために、私自身は、この講演をしている。

これまで、創造に言及している詩篇を見てきた。詩篇以外の旧約聖書にも、創造に言及している個所はたくさんある。しかし本講演では、ある程度まとまってふれている個所に限り、紹介する。それは、ヨブ記、箴言、イザヤ書に見られる。むろん、それぞれの箇所を十分に解説する時間はない。創世記 1 章の創造記録との関連で、取り上げるのみである。この講演をきっかけに、ご自分でこれらの箇所を深く味わっていただけると、嬉しく思う。

8. ヨブ記 9 章 5-10 節(神が支配者であり、創造者であることを伝えている)

ヨブ記 9 章 1 節から 10 章 22 節は、ヨブによる友人のビルダデへの応答である。ヨブは、彼のもとに訪問してきた三人の友人によって慰められることはなかった。それどころか、さらに深く傷つき、悩みの中に追い込まれてしまった。そのような中でヨブは、神の絶対的な主権に寄りすがろうと、神の創造、あるいは神の支配に言及する。

神が山々を移されるが、だれもこれに気づかない。神は怒ってこれをくつがえされる。(5 節)

神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。(6 節)
神が太陽に命じると、それは上らない。星もまた封じ込められる。(7 節)
神はただひとりで天を張り延ばし、海の大波を踏まれる。(8 節)
神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。(9 節)
神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。(10 節)

この箇所の主語は、すべて神である。ヨブは、神が一つ一つの被造物を直接支配していることを強調している。ここは、三連詩(5-6 節、7-8 節、9-10 節)で、それぞれは、二つの平行法の文章によって構成されている。

5-6 節では、「山々を移される」と「地をその基から震わす」とが対応し、「怒ってこれをくつがえされる」と「その柱は揺れ動く」が対応している。このテキストは、地震について言及しているのだろう(詩篇 18:7、82:5、97:5、イザヤ 13:13、29:6 参照)。「地をその基から震わす」と「その柱は揺れ動く」という表現は、柱の上に地の基が置かれ、その上に山などが乗っかっているかのような描写である(詩篇 75:3、I サムエル 2:8 参照)。むろん、これを文字どおりに解釈する学者もいるが、詩的な表現と見なす方がよい。創世記 1 章で言えば、三日目の「地」の創造に相当する。

7-8 節には、神が、対照的な二つのものを意のままに支配する権限をもっている事実を歌っている。7 節の「神が太陽に命じると、それは上らない」と「星もまた封じ込められる」は、神が昼夜両方の支配者であることを宣言している。8 節では、「天を張り延ばし」と「海の大波を踏まれる」が対比されている。「天を張り延ばし」(イザヤ 40:22、42:5、51:13、エレミヤ 10:12、51:15、ゼカリヤ 12:1 など参照)とは、創世記 1 章の二日目の「天」の創造と関係がある。「海の大波を踏まれる」は、海の巨獣を支配することを意味している。これは、創世記 1 章の三日目の「海」及び五日目の「海の巨獣」の創造と関係する。「神はただひとりで」という句は、古代中近東の世界では、いろいろな神々が支配権を争奪しあっていることを強く否定している。

9-10 節は、平行法の連句である。9 節の「神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた」と、10 節の「神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない」とは、二行連句である。5-6 節と 7-8 節の二行連句は、現在の描写を中心に歌ったものである。しかしこの最後の連句は、過去の創造時への言及である。「神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた」(アモス 5:8、ヨブ 38:31-32 参照)とは、創世記 1 章の四日目の「星の創造」を指す。これは、7 節の「星もまた封じ込められる」と正反対の状態をいう。

10 節の「神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない」は、これまで述べてきたことの総まとめである。「大いなること」とか「奇しいみわざ」とは、神の創造のみわざを指している。それは、人にとっては、測り知り得ないことである(ヨブ 5:9 のエリファズの言葉にも同じような表現が見られる)。この箇所でヨブが伝えたかったメッセージは、まさにこの点にあった。神の創造の奥義は、現代科学をもってしても理解し得るようなものではない。

9. ヨブ記 38 章 4-11 節(神が創造の時の状況についてヨブに尋ねる)

ヨブを訪れた 3 人の友人たちは、入れ替わり立ち代わり、ヨブを励まそうと努めた。だが、すべて無駄だった。ヨブの苦悩は、かえって増すばかりだった。そんな中にあったヨブに、神は痛みを覚え、最後に語られた。ヨブの問いかけは、問題の核心ではなかった。だから、神はヨブの質問には、何一つ答えなかった。その代り、ヨブがこの世界の自然の秩序に全く無知であることを示された。そのようなことさえ分からないのに、神の御計画や霊的奥義を分かるはずはない、神はヨブにそう語りかけたのである。

わたしが地の基を定めたとき、あなたはどこにいたのか。あなたに悟ることができるなら、告げてみよ。(4 節)
あなたは知っているか。だれがその大きさを定め、だれが測りなわをその上に張ったかを。(5 節)
その台座は何の上にはめ込まれたか。その隅の石はだれが据えたか。(6 節)
そのとき、明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ。(7 節)
海がふき出て、胎内から流れ出たとき、だれが戸でこれを閉じ込めたか。(8 節)
そのとき、わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした。(9 節)
わたしは、これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、言った。(10 節)
「ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」と。(11 節)

神がこの世界を造られたとき、ヨブはそこにいなかった。従って、ヨブは神のすべてのわざを知ることはできない。できなくても神に従っていく、それが信仰なのだ。神はヨブに、そう語りかけた。4 節の「地の基を定めた」、5 節の「その大きさ」、6 節の「その台座」とか「その隅の石」などは、創世記 1 章の三日目の「地の創造」に関連する。7 節の「明けの星々が共に喜び歌い、神の子たちはみな喜び叫んだ」は、三日目の創造時に、天上の世界で起こっていたことを伝えている。

4-7 節は、陸地の創造に関係したことだった。8 節からは、目を陸から海に転じる。「海がふき出て、胎内から流れ出た」は、海の創造が出産に例えられている。9 節の「わたしは雲をその着物とし、黒雲をそのむつきとした」とは、神が荒れ狂うようすの海を、新生児同様に扱われたことを述べている。10-11 節の「これをくぎって境を定め、かんぬきと戸を設けて、ここまでは来てよい。しかし、これ以上はいけない。あなたの高ぶる波はここでとどまれ」とは、神が海と陸の間の境界線を定めたことに言及している。人は荒れ狂う海を鎮めることはできない。それを支配しているのは、神である。神は、ヨブに、人は人であり、その限界を知って生きよ、と語られた。神の創造の力は、人間の限界を教えている。

10. 箴言 8 章 22-31 節(神は知恵を用いてこの世界を造られた)

箴言 8 章のテーマは、世界の創造ではない。神の知恵である。その神の知恵が、1 人称により、自らについて語るという形式で記述している。この知恵は、世界の創造以前から、神と共にいたと告白する。この知恵の告白に付随して、この 8 章には、世界の創造が言及されている。ところが、その言及の中身は、創世記 1 章の創造の描写に驚くほど似ている。

主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから、わたしを得ておられた。(22 節)

大昔から、初めから、大地の始まりから、わたしは立てられた。(23 節)

深淵もまだなく、水のみなざる源もなかったとき、わたしはすでに生まれていた。(24 節)

山が立てられる前に、丘より先に、わたしはすでに生まれていた。(25 節)

神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。(26 節)

神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、わたしはそこにいた。(27 節)

神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、(28 節)

海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、(29 節)

わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、(30 節)

神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。(31 節)

この箇所を知恵とは何者なのか。コロサイ 1 章 15 節の「造られたすべてのものより先に生まれた方」や、ヨハネ 1 章 1-3 節の「ことば」と結びつけ、キリストを指すと解釈する人もいる。しかし私自身は、この箇所に箴言全体が説く知恵と違う内容を読み込むことには、大きな違和感を覚える。知恵は擬人化され、自らが語っているかのような文学的手法が取られている、と解釈する方がずっと自然である。ただ、この問題に深入りすることは、本講演の趣旨から外れる。創世記 1 章の創造の問題に関わる事柄にのみ、焦点を当てて考察しよう。

22 節から 23 節までは平行法に基づく二連詩である。22 節の「主は、その働きを始める前から、そのみわざの初めから」と、23 節の「大昔から、初めから、大地の始まりから」は同じことを言い、いずれもこの世界が始まる前を指している。これは、創世記 1 章の冒頭の言葉「初めに」に相当する。

24-25 節は、もう一つの平行法に基づく二連詩である。24 節の「深淵もまだなく、水のみなざる源もなかったとき」と、25 節の「山が立てられる前に、丘より先に」も同様である。24 節の「深淵」とか「水のみなざる源」は、創世記 1 章 2 節の「地」がなかったときと関連がある。

27 節の「天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき」とか、28 節の「神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め」とは、二日目の創造への言及であろう。「深淵」と訳されている「テホーム」は、創世記 1 章 2 節、あるいは 5 節の「やみ」と訳されている言葉と同じである。

29 節の「海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき」とは、三日目の「陸と海の創造」に関連する。31 節の「神の地、この世界」は、この宇宙が神の所有物であることを示唆する。

創世記 1 章には、「神は仰せられた」という表現が、10 回出てくる(3、6、9、11、15、20、24、26、28、29 節。22 節のヘブル語原文には出てこない)。神が語られた言葉は、神の豊かな知恵の現れである。その知恵には、神の思い、計画、意志などのすべてが含まれていた。この世界の被造物は、神の知恵がそのまま反映されている。現代の科学者たちは、被造物の美しさ、そこに貫かれている自然法則の見事さに驚嘆の声をあげている。箴言 8 章で明らかにされている神の知恵によって、これらのすべては造られたものである。

11. イザヤ書 40 章以降(世界の創造者であるとの神のタイトル)

聖書全体を通じて、イザヤ書ほど多くの個所で「世界の創造」に言及している書物はない。特に、バビロン捕囚からの解放を預言したイザヤ書 40 章以降に顕著である。しかし、そのほとんどは、神が創造者であるという「タイトル的な言及」である。創造そのものについて論じている個所は、それほど多くはない。二、三か所のみである。そのようなテキストについては、この項の後で扱う。まず、タイトル的な用法を紹介しよう。

最初は、預言者自身が語っているタイトル的な用法である。イザヤは、「神をだれになぞらえ、神をどんな似姿に似せようとするのか」(イザヤ 40:18)と民に問うた。そして、この問いに対し、預言者自ら次のように答えている。

主の手がこのことをし、イスラエルの聖なる者がこれを創造した。(イザヤ 41:20)

天を造り出し、これを引き延べ、地とその産物を押し広め、その上の民に息を与え、この上を歩む者に霊を授けた神なる主。(イザヤ 42:5)

天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを茫漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方。(イザヤ 45:18)

天を引き延べ、地の基を定め、あなたを造った主。(イザヤ 51:13)

神が「天を引き延べ、地の基を定めた。(イザヤ 51:16)

問いかけて答えを出す、このような形式で語ったのは、預言者だけではなかった。神ご自身もまた、「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」(イザヤ 40:25)とか、「わたしをだれになぞらえて比べ、わたしをだれと並べて、なぞらえるのか」(イザヤ 46:5)と、民に問いかけている。しかも、預言者同様、神自らが民に対し、その問いに答えを出している。

わたしは万物を造った主だ。わたしはひとりで天を張り延ばし、ただ、わたしだけで、地を押し広げた。

(イザヤ 44:24)

わたしは光を造り出し、やみを創造し、平和をつくり、わざわいを創造する。わたしは主、これらすべてを造る者。(イザヤ 45:7)

このわたしが地を造り、その上に人間を創造した。わたしはわたしの手で天を引き延べ、その万象に命じた。

(イザヤ 45:12)

わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらはこぞって立ち上がる。(イザヤ 48:13)

このようなタイトル的な表現をまとめると、神とは、①天を引き延ばし、天の万象を造った方、②地の基を定め、押し広げ、地の万象と産物をつくった方、③地を人の住处とし、人間を造った方、④光、やみ、平和、わざわいをもつくった方、ということになる。創世記 1 章の創造に比べると、無いのは海と海に泳ぐ魚、空と空を飛ぶ鳥、地に生きる動物ぐらいである。むろん、これらを「万象」という言葉の中に含めれば、創世記 1 章の被造物の中でタイトル的な用法に出てこないものは何もない。むしろ、両者の表現はとてもよく似ており、二つの成立過程においては何らかの依存関係があったのではないかと推測したくなるほどである。

実際多くの聖書批評学者たちは、両者の依存関係を認めている。両者の類似点を指摘し、創世記 1 章は紀元前 6 世紀頃に記された、と主張する。いわゆる、創世記 1 章の第二イザヤ著作説である。このような学問的方法論には、それなりの説得力がある。しかし、類似点をあげて同一著作説を主張するのは、単純すぎる。むろん、その可能性はある。聖書の無誤性の教理を持ち出し、そのような方法論そのものを否定するのは間違っている。と同時に、無批判に受け入れるのも避けるべきである。

神の民イスラエルは、モーセから第二イザヤの時代まで、創世記 1 章に記されているような世界創造の記録を何一つもたず、宗教生活を送ることができただろうか。古代中近東の宗教史を知れば知るほど、そのように想像することは難しい。紀元前 3,000 年から 2,000 年にかけてのメソポタミア文明下の人々は、世界のどの領域をどの神々が支配しているのかという点に最大の関心を払っていた。それは、彼らが日常生活において多くの困難に遭

遇し、神々の助けを必要としていたからである。

神は、アブラハムをカルデヤのウルから召された。そのとき神はアブラハムに、土地と子孫を与え、イスラエル国家の基になることを約束した。その神は唯一の神であり、世界の創造者・支配者であることは当然の前提であった。しかし、この信仰が、創世記 1 章のような形で花開くのは、モーセ時代の安息日神学を待たねばならなかった。その後、修正されることはあっただろう。だが、創世記 1 章の「世界創造の記録」の中核(ケルネル)は、アブラハム時代にまでさかのぼるはずである。創造物語を欠いた宗教など実在しないし、存続できない。

考えていただきたい。人類の宗教史において、唯一神教は、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教だけである。その唯一神教の根源はアブラハムであり、旧約聖書だった。唯一神教の本質は、この宇宙は唯一の神によって創造されたということである。それを欠いた唯一神教など、実態のない宗教である。出エジプト、カナン征服、ダビデ王制、ソロモンの神殿、バビロン解放、そのどれ一つとっても、「宇宙の創造者にして支配者なる神」という概念無くしてはあり得ない出来事だった。

12. イザヤ書 40 章 21-26 節(神は万物の創造者であり、支配者である)

イザヤ書において、神が宇宙の創造者であると述べている箇所は、タイトルだけではない。創造そのものについてまとめて記述されている箇所もある。例えば、イザヤ書 40 章 21-26 節である。

あなたがたは知らないのか。聞かないのか。初めから、告げられなかったのか。地の基がどうして置かれたかを悟らなかったのか。(21 節)

主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる。(22 節)

君主たちを無に帰し、地のさばきつかさをむなしいものにされる。(23 節)

彼らが、やっと植えられ、やっと蒔かれ、やっと地に根を張ろうとすると、主はそれに風を吹きつけ、彼らは枯れる。暴風がそれを、わらのように散らす。(24 節)

「それなのに、わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」と聖なる方は仰せられる。(25 節)

目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない。(26 節)

この箇所の中心は、神が神の民に、「わたしを、だれになぞらえ、だれと比べようとするのか」(25 節)と問いかけたことにある。この問いに対し預言者は、21 節では「地の基」を置いた方、22 節では「地をおおう天蓋の上に住まわれる」方、あるいは「天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる方」と答えている。

さらに、23 節と 24 節では、「君主たち」や「地のさばきつかさ」たちが完全に神の支配下に置かれていることを説明する。そして最後の 26 節では、「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ。この方は、その万象を数えて呼び出し、一つ一つ、その名をもって、呼ばれる。この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない」と、真の神がどのような方であるかを宣言している。

この箇所の「地の基」(21 節)は、創世記 1 章では三日目の創造に関わりがある。「地をおおう天蓋」(22 節)は、二日目の創造に関係する。これらの表現が詩的なものなのか、それとも古代中近東の宇宙像を反映したものかは、議論の余地がある。しかし、どちらであっても、預言者の言わんとすることは明白である。神とは万物の創造者であり、それ以外ではない、ということである。

26 節の「その万象」は、直前に「目を高く上げて、だれがこれらを創造したかを見よ」とあり、直後に「一つ一つ、その名をもって、呼ばれる」と言われている。すると、創世記 1 章の四日目の「天体の創造」に言及していることは明らかである。なお、「一つ一つ、その名をもって、呼ばれる」とは、星の一つ一つに至るまで神の支配下にあることを強調している。

預言者は、宇宙の創造に関する問題を解明することを期待して、これらの問いかけをしているのではない。神が創造されたこれらの被造物をととして、イスラエルの民が信じている神こそ万物の創造者であることを明確に示し、「この方は精力に満ち、その力は強い。一つももれるものはない」ことを知るようにと、励ましている。

聖書は、いろいろな個所で、全被造物が神によって造られたと宣言している。それは、困難に直面している神の民を励ますためだった。そのような記述を、あるキリスト者たちは、創造のプロセスを論じる材料にしている。それは、聖書記者にとっては、想定外のことだった。実際、キリスト教界がそのような取り扱い方を始めるのは、中世も後半からだった。それまでは、この宇宙は宗教的な意識をもって見られてきた。科学的な問題意識で宇宙を観察するようになるのは最近のことなのである。むろん、宇宙の管理者に任じられている者としては、宇宙をそのような目で見ることは当然である。だが、それは、聖書の記述をとおしてではない。聖書は、神からの語りかけを聞き、神に祈り、神を賛美するためのものである。

Ⅲ. 新約聖書における創造の記録

これまで、旧約聖書に見られる世界創造の記録を一とおり見てきた。今度は、新約聖書に移ろう。新約聖書は、世界創造については、ほとんど何もふれていない。それを前提に、キリストの贖いの物語が展開されている。というわけで、新約聖書には、創造者なる神に呼びかける祈りがたくさん出てくる。

これを聞いた人々はみな、心をつつにして、神に向かい、声を上げて言った。「主よ。あなたは天と地と海とその中のすべてのものを造られた方です。」(使徒 4:24)

皆さん。どうしてこんなことをするのですか。私たちも皆さんと同じ人間です。そして、あなたがたがこのようなむなしいことを捨てて、天と地と海とその中にあるすべてのものをお造りになった生ける神に立ち返るように、福音を宣べ伝えている者たちです。(使徒 14:15)

主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。(黙示録 4:11)

彼は大声で言った。「神を恐れ、神をあがめよ。神のさばきの時が来たからである。天と地と海と水の源を創造した方を拝め。」(黙示録 14:7)

永遠に生き、天とその中にあるもの、地とその中にあるもの、海とその中にあるものを創造された方をさして、誓った。「もはや時が延ばされることはない」(黙示録 10:6)。

これらの祈りの中での呼びかけは、神へのタイトル的な使い方である。本講演では、これ以上詳しい説明は避ける。初代のキリスト者たちが、宇宙の創造をどのようにとらえ、祈りの中で利用していたかを、じっくり黙想していただきたい。創造論が最も脚光を浴びる場所、それは科学ではなく、祈りの世界である。神の前にひれ伏す時が、その御業である創造の世界に思いを寄せる時でもある。

新約聖書が伝えたい中心的なメッセージは、キリストの贖いである。その贖いのご計画は、万物の創造以前から神のみ旨の中にあつた。これは、創造論とか宇宙論の問題というより、贖罪論の問題である。しかし、宇宙創造の目的と深く関わりがあるので、この箇所を取り上げたい。

神を真剣に求めている人が、牧師に尋ねた。神は、創造以前には何をしておられたのか、と。それに対し牧師は、そのようくだらない質問をする人のために、地獄を用意していたのだ、と答えた。本当にあつた話とは思わないが、腹が立った。真剣な質問に対しこんな茶化した答えを出す、そういうことはやめてもらいたい。

永遠の昔、まだ何もないとき、神は何をしておられたのか、そんなことは確かに、余計なお世話かもしれない。だが、そう言われてもなお、世界を創造される前、永遠の神がどのように過ごしておられたのかは、興味深い問題である。むろん、人間に分かるはずはない。分からなくてもよい。それは、一匹の蟻が、人間の世界を心配しているようなものだろう。にもかかわらず、私には気になる。特に、神はなぜ人を創造されたのだろうか、ということが。

聖書の中のどこかに、このことに関するヒントはないのだろうか。ある。ヒント以上のものがある。それは、イエスの祈りの中だった。

1. ヨハネ 17 章(創造以前の人間に対するイエスの思い)

ヨハネの福音書 17 章には、イエスの祈りが記されている。十字架に架けられる前夜、12 弟子の前で祈られた祈りである。その祈りは、次のような言葉で始まる。

今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。(ヨハネ 17:5)

イエスは、御父のもとで世界の創造以前からもっていた栄光について祈られた。イエスは、御父との特別な関係を持ち、栄光に輝く立場にあった。この祈りの中でも、そのことが繰り返し述べられている。イエスのものはすべて御父のもの(10 節)、御父のものはイエスのものである(10 節)。イエスは御父によって遣わされ(21、23 節)、御父によって栄光を与えられ(22 節)、御父によって愛されている(23 節)。御父はイエスにおられ、イエスも御父におられる(21、23 節)。

このイエスの祈りには、キリスト者の立場についても明らかにされている。キリスト者とは、御父から出ており(7 節)、御父のものである(6、9 節)。御父が世から取り出してくださった者であり(6 節)、この世のものではなく(14、16 節)、世から憎まれる者である(14 節)。御父がイエスに下さった人々であり(6、7、9 節)、イエスからみことばを与えられる者である(14 節)。イエスが御父から受けたみことばを受け入れ(8 節)、それを守る人である(6 節)。真理のみことばによって聖め別けられ(17 節)、父(あるいは御子)の御名の中に保たれる者である(11、12 節)。キリスト者とは、イエスが御父から出てきたことを知り、御父がイエスを遣わされたことを信じる人である(8 節)。キリスト者は、イエスの喜びを全うさせ(13 節)、イエスに栄光をささげる者である(10 節)。御父が御子におられ、御子が御父の中にいるように、すべてのキリスト者が一つになることを求めておられる(11、21、22、23 節)。

キリスト者のために祈り続けられたイエスは、その最後を次のような祈りの言葉で締めくくられた。襟を正し、すべてのキリスト者に、イエスの祈りを聞いていただきたいと思う。

父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見ようになるためです。そして、わたしは彼らにあなたの御名を知らせました。また、これからも知らせます。それは、あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中にあり、またわたしが彼らの中にいるためです。」(ヨハネ 17:24 -26)

イエスは、「あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光」と祈られた。イエスがもっておられた栄光とは、御父の御子に対する愛である。世界創造の前からの愛である。しかもその愛について、「あなたがわたしを愛してくださったその愛が彼らの中に」あるように、と祈られた。

何ということだろう。御父のイエスに対する愛と同じ愛が、キリスト者の中にも注がれるように、との祈りである。御父が御子に対してもっておられる愛とは、独占的な愛であり、永遠の愛である。その愛が、キリスト者に注がれるようにというのである。しかもイエスは、「またわたしが彼らの中にいるため」だと祈られた。御父の愛がキリスト者に注がれる。そのキリスト者の愛の中にイエスがおられる。これが、御父と御子とキリスト者の間に生じる「愛によって一つになる」ことである。

ここには、我々の理性では到底理解できない事柄が記されている。宇宙が創造される以前に、御父と御子は栄光を共有しておられた。その栄光とは、御父と御子の間の愛の交わりである。この愛の交わりを、御父と御子の間に留めず、キリスト者の間にまで広げよう、というのである。神は、その愛の関係を分かち合える存在として、人間の創造を計画された。それが、神が人を「神のかたち」に造られた理由だったのである。

2. エペソ 1 章(創造以前の人間に対する神の計画)

イエスの祈りによれば、御父と御子は、創造以前にもっていた親しい交わりを、キリスト者の間に広めようと話し合っていた。それと同じことを、パウロはエペソ人への手紙の冒頭で解説している。

私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神はキリストにあって、天にあるすべての霊的祝福をもって私たちを祝福してくださいました。すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前から彼にあって選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、みむねとみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられました。(エペソ 1:3-5)

まず、「世界の基の置かれる前から」という句に注目していただきたい。神は、宇宙創造以前に、キリストにある「霊的祝福」をもってキリスト者を祝福された。これは、キリストの贖いを指している。すると神は、創造以前から人間

の墮落を予測していたことになる。何ということだろう。神は人の墮落を予測し、キリストの贖いを計画され、その贖われた人々に愛の交わりを広げていこう、と計画されたのである。

では、この霊的祝福とは、具体的に何を指しているのか。それは、キリスト者が一つに集められ、「御国を受け継ぐこと」である。

いっさいのものがキリストにあって、天にあるもの地にあるものがこの方にあって、一つに集められるのです。この方にあって私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。みこころによりご計画のままをみな行なう方の目的に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。それは、前からキリストに望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。この方にあってあなたがたもまた、真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。聖霊は私たちが御国を受け継ぐことの保証です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。(エペソ 1:9-14)

この記述によれば、キリスト者とは、「真理のことは、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じた」人のことである。その人は、キリストにあって「御国を受け継ぐ者」になる。そして、聖霊が「御国を受け継ぐことの保証」である。結局、天地創造以前からキリスト者に用意されていた「霊的祝福」とは、「御国を受け継ぐ」ことだった。「御国を受け継ぐ」とは、天国に入れるということではない。神が王として支配されている御国の相続人になる、ということである。御国の相続人とは、御国の共同統治者ということである。御国の統治は、神の御霊によってなされる。その御霊を既に受けているということは、今この地上において、その御国が既に始まっていることを意味している。

この御国は、イエスが語られた「神の国」のことである。御国の相続は、死んで天国に行ってから始まるのではない。キリストを信じた時から、すでに始まっている。しかも、このようなすばらしい特権が、天地創造以前から神の永遠のご計画の中で進められていた、というのである。何という大きな喜びであろう。

先のイエスの祈りでは、キリスト者の受ける栄光とは、神およびキリストと一つとなり、愛の交流をもつことだと学んだ。この交流は、実際問題としてどのような形で実現するのか。神及びキリストと共に、被造物を支配することによってである。

3. I コリント 2 章(創造以前から用意されていた十字架の贖い)

神は、イエスの贖いを天地創造以前から準備されていた。これは、神の知恵の奥義である。人は誰も、この神の知恵を悟ることはできない。この神の知恵の中で、キリストの十字架の奥義は世界創造以前から練られていた。

私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。(I コリント 2:6-8)

パウロがここで語っていることは、「隠された奥義」である。「奥義」とは、人間の知恵では到達し得ない真理で、「神の知恵」に属する。それはキリストの十字架に関するものである。イエス時代の人々は、イエスを十字架上にはりつけにした。パウロはそのことを、「神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたもの」と、説明する。

この箇所で言う「私たちの栄光」とは何か。キリスト者の栄光は、ヨハネ 17 章のイエスの祈りによれば、キリスト者が御父及び御子との交わりにあずかることだった。パウロによれば、神の国の民になり、相続財産をキリストと共に受け、御国をキリストと共に協働統治することだった。ヘブル人への手紙によれば、それは、神と共に、被造物の管理責任を果たすことだったのである。

このようなすばらしい恵みをもたらすのが、十字架の奥義である。それは、世界のはじまる前にあらかじめ立てられた神のご計画に基づくものだった。もしこれが真実であるなら、神は人類の墮落を、世界創造以前からご存知だったことになる。というより、「あらかじめ定められたもの」という表現は、もっと強い印象を受ける。あたかも、神ご自身の意思が強く働いていたかのような書き方である。むしろ、人間の墮罪に神の責任があった、などと言おうとしているのではない。ただ、人間の墮落のような忌まわしい出来事さえ、神の最終的な恵み深い主権のもとにあった、ということである。

人間の墮落、そしてキリストによる贖い、これは、神にとっても大きな冒険的な出来事だった。神は、人に自由意

思を与えた。人間がその自由意思の使い方を失敗することを、お見通しのうえのことだった。それゆえあらかじめ、キリストの贖いを計画された。その贖いをとおして神のいのち(聖霊)を分かち合い、神の子に招こうとしたのである。

もし人間が神の知恵を悟っていたら、「栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう」とは、どういう意味か。イエス時代のユダヤ人は、イエスを十字架に架けてしまった。なぜか。イエスを神に背く者と考えたからである。彼らは、イエスを理解することができなかった。「栄光の主」を見ることができず、「罪人の一人」に数えてしまった。それゆえ、イエスを十字架に架けてしまったのである。

彼らの行動、それはむろん、無知に基づくものだった。全く愚かな行動だった。しかし神は、この人間の無知さえよく御存じで、それを踏まえて十字架による恵みを用意してくださったのである。まさに、神の知恵は人間の愚かさに勝ったものだった。「神の愚かさは人よりも賢く、神の弱さは人よりも強い」(Ⅰコリント 1:25)とは、よく言ったものである。

宇宙が人間によって協働統治されるとの神のご計画は、創造以前に立てられたものだった。それは、「私たちの栄光のため」だった。栄光とは、本来神にのみ属する。神は、「わたしはわたしの栄光を他の者には与えない」と言われている(イザヤ 48:11)。にもかかわらず、ここでは、「キリスト者の栄光」について述べている。キリスト者がどれほど大きな恵みを受けているのか、それは、筆致に尽くしがたいものである。

パウロは、イスラエル史の歩みを振り返り、神のお取り扱いの絶妙さに驚嘆した。神は、ユダヤ人を捨てられ、異邦人を救おうとされているかのように見えた。しかしそれは違った。異邦人に恵みが及んだのは、ユダヤ人を奮起させるためであり、最終的にはユダヤ人も異邦人も皆一つになって神の祝福にあずからせるためだった。そのような神の大きなご計画に気づいたパウロは、次のような叫びを発した。

ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか。また、だれが、まず主に与えて報いを受けるのですか。というのは、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです。どうか、この神に、栄光がとこしえにありますように。アーメン。(ローマ 11:33-36)

宇宙創造のご計画、それは、イスラエル史の比ではない。神は、歴史のすべてを、万物の創造以前から、ご計画された。すべてのキリスト者は、パウロと共に、この神への賛美を叫ばざるを得ない。

4. ヨハネ 1 章、コロサイ 1 章、ヘブル 1 章(万物の創造の目的はキリスト)

神が万物の創造者である。それは、旧約聖書が教えているところであり、誰でも信じている。ところが、新約聖書は、キリストが万物の創造者であるとも述べている。このことが結局、三位一体の真理に結びついていくのであるが、これは全く不思議な啓示である。この点に言及している新約聖書のみことばを読んでいこう。まず、ヨハネの福音書 1 章である。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。この方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。(ヨハネ 1:1-3)

このヨハネの福音書は、「初めに」という言葉で始まっている。これは明らかに創世記 1 章の冒頭の箇所を意識したものである。創世記もまた「初めに」という言葉で始めているが、その「初め」はこの世界の初めであり、時間の初めである。このヨハネの福音書の方は、時間のない、考えられる限りの初めであり、神の世界における初めである。創世記の記述より、はるか永遠の昔にさかのぼる、人間の知性では論じることのできない初めである。

福音書の著者は、「すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない」と宣言する。そして著者は、このキリストにいのちと光があったことを告げる。「この方にいのちがあった。このいのちは人の光であった。光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。」(ヨハネ 1:4-5)ここには、いのち、光、やみが出てくる。この順番は、創世記 1-2 章の順番とは逆である。ヨハネの福音書の最初と創世記の最初の間にキアスムス構造を読み取ろうとするのは、行き過ぎかもしれない。しかし、そう言いたくなるほど、ヨハネの福音書の著者は、創世記を意識している。

キリストがこの世界を創造されたことについては、パウロもコロサイ人への手紙 1 章において述べている。この箇所は、初代教会の讃美歌集からの引用だと考える学者が増えている。そうかもしれない。そうであってもなくても、初代のキリスト者たちが、キリストについてどのように信じていたかを、よく考えていただきたい。

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。(コロサイ 1:15-17)

ここでパウロは、「万物は御子にあって造られた」、「すべて御子によって造られた」、「万物は、御子によって造られ」と、キリストが万物の創造者であることを三度も繰り返し、強調する。さらに「御子のために造られた」と、御子が相続者であることが述べられている。さらに、「万物は御子にあって成り立っています」と、御子が万物の保持者であることも付け加えられている。これまで我々は、万物は人間をゴールにして造られたと見てきた。むしろ、そのような側面もあり、そのように言うこともできる。しかし、本当は、人間は最終のターゲットではない。キリストこそ、全被造物の中心におられる方だった。

同じことがヘブル人への手紙 1 章 2-3 節に言われている。

この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。(ヘブル 1:2-3)

ここでも、キリストと万物の関係は極めて明確に整理されている。「御子を万物の相続者とし」とは、キリストが相続者であることを述べている。「御子によって世界を造られました」は、キリストが創造者であることを明らかにしている。「その力あるみことばによって万物を保っておられます」は、キリストが万物の保持者であることを宣言している。相続者、創造者、保持者、この順番は重要である。神は、創造以前から、万物を御子キリストの相続分として定められていたのである。それゆえ、一切の被造物は御子に所属するものとして造られたのである。

5. ヘブル 2 章(被造物の管理権を回復したキリストの贖い)

ヘブル人への手紙 1 章の冒頭に続き、この手紙の 2 章 6-13 節は、世界の創造、特に創世記 1 章との関係で、最も重要な箇所である。この箇所は、人間の被造物管理という、創世記の初めから問題にされていたテーマが展開されている。この箇所とそのテーマについては、既にいろいろな所で講演をし、講演原稿もいくつか冊子にまとめてきた。従って、本講演の時間もほとんど残されていないこともあり、割愛する。皆さんきっと興味をお持ちだと思う。大野教会のホームページにアクセスし、講演原稿をダウンロードしてお読みいただきたい。

神は日々、「今日」という新しい日を創造され、キリスト者にすべての被造物の管理を託している。我々は、「神の相続人」であり、キリストとの「共同相続人」である(ローマ 8:15-17)。相続の対象は、人間とその社会のすべてを含めた被造物である。むしろ、自然界も含まれる。今の世界だけでなく、やがて来る新しい世界も含まれる。

その管理には、神のみ心を知り、神からのアドバイスを必要とする。そこに祈りがある。自分勝手に治めるのではない。神は我々の先頭に立ち、今日も全被造物を治めておられる。基本的には神が定めた「一般法則」に基づいての統治である。しかし神は、法則に拘束される方ではない。必要であれば、いつでも奇跡(法則を超えた業)を行うことができる。神は法則の支配者である。Deismではなく、Theismである。キリストは、神の働きを見ながらご自分の働きを進められた。キリスト者も同じである。神とキリストの働きを見ながら、与えられた使命を追究していくのである。

6. 黙示録 21-22 章、イザヤ書 65-66 章(神は新しい天と新しい地を創造する)

聖書は、新しい天と新しい地の創造を教えている。それは、これまで述べてきた創造とどのような関係にあるのか、未だ不明の部分が多い。しかし、深い関わりがあることは間違いない。従って、ここでその問題についてふれ、本日の講演を終わりたいと思う。

新約聖書は、「新しい天と新しい地」の創造について、二箇所で言及している。まず、ペテロの手紙第二 3 章である。

そのようにして、神の日の来るのを待ち望み、その日の来るのを早めなければなりません。その日が来れば、そのために、天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまいます。しかし、私たちは、神の約束に従って、正義の住む新しい天と新しい地を待ち望んでいます。(Ⅱペテロ 3:12-13)

ペテロは、「神の日(神の裁きの日)」に言及する。そして、「神の日」には、今の世界は「天は燃えてくずれ、天の万象は焼け溶けてしまう」と述べている。天と天の万象が燃えてくずれるとは、いったいどのようなことを想定すればよいのか。天については述べられているが、地についてはふれられていない。地はこの崩壊には含まれていないのか。続く「新しい天と新しい地」という表現は、天と地の両方がすべて含まれているのではないか。イエスの「天地が滅びうせない限り」(マタイ 5:18)とか、「この天地は滅び去ります」(マタイ 24:35)という言葉は、地を含めて考えるべきではないか、等々考えなければならないことはたくさんある。('火'というのはノアの洪水の'水'に対比された言葉で、もしそうだとすると、洪水によって滅ぼされたはずの'地'が依然存続していることも考えておかねばならない。'滅ぼされる'という言葉は、崩壊してなくなってしまうという意味ではないのかもしれない。)

ペテロは、新天新地は「正義の住む」世界だと述べている。ここで、正義が強調されているのは、この世界が、サタンあるいは罪や悪の力によって支配されているという前提に立っている。新しい世界の「正義」とは、神の支配原理であろうが、具体的にはどのような中身なのだろうか、考えてみるとよい。

さらにこの新天新地は、「神の約束」に基づいている。この約束とは、旧約聖書の預言者たちが明らかにした「神が統治する新しい世界」である。「子羊が狼と共に住んでいる平和な、恵みに溢れた世界」である。

新約聖書において、「新しい天と新しい地」が出てくるもう一か所は、黙示録の最後である。

また私は、新しい天と新しい地とを見た。以前の天と、以前の地は過ぎ去り、もはや海もない。私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、{また彼らの神となり、}彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである。」(黙示録 21:1-4)

この箇所は、キリスト者の葬儀の時によく読まれる。いわゆる天国の光景が描かれていると理解されているからである。それは、見当違いではないと思う。天国とは、どのようなところなのか。今の世界とは全く違う、新しい世界なのか。とても興味がある。しかし、そのような問題に深入りすることは、本講演の趣旨からそれる。被造物管理の神学では、終末の問題もおいおい扱われる。そのときを楽しみにしていただきたい。

この新天新地は、旧約聖書の「神の約束」に基づいていることは既に述べた。この「新しい天と新しい地」に言及しているのは、預言者イザヤである。彼は、二箇所であらわされている。まず、65 章 17 節である。

見よ。まことにわたしは新しい天と新しい地を創造する。先の事は思い出されず、心に上ることもない。(イザヤ 65:17)

このイザヤが伝えている「新しい天と新しい地」とは、どのようなものなのか。65 章 17 節の後、次のような文章が続く。一つ一つの文章を味わい、じっくりお読みいただきたい。難しく考える必要はない。まずは、文字どおりの意味をつかみ取っていただければ十分である。

だから、わたしの創造するものを、いついつまでも楽しみ喜べ。見よ。わたしはエルサレムを創造して喜びとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムを喜び、わたしの民を楽しむ。そこにはもう、泣き声も叫び声も聞かれない。そこにはもう、数日しか生きない乳飲み子も、寿命の満ちない老人もない。百歳で死ぬ者は若かったとされ、百歳にならないで死ぬ者は、のろわれた者とされる。

彼らは家を建てて住み、ぶどう畑を作って、その実を食べる。彼らが建てて他人が住むことはなく、彼らが植えて他人が食べることはない。わたしの民の寿命は、木の寿命に等しく、わたしの選んだ者は、自分の手で作った物を存分に用いることができるからだ。彼らはむだに労することもなく、子を産んで、突然その子が死ぬこともない。

彼らは主に祝福された者のすえであり、その子孫たちは彼らとともにいるからだ。彼らが呼ばないうちに、わたしは答え、彼らがまだ語っているうちに、わたしは聞く。狼と子羊は共に草をはみ、獅子は牛のように、わらを食ひ、蛇は、ちりをその食べ物とし、わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、そこなわな

い」と主は仰せられる。(イザヤ 65:18-25)

イザヤが預言した新天新地は、今の世界と全く違うというより、この世界の延長線上に形成されるような印象を受ける。この記述を、文字どおりに解釈するのがよいのか、それとも象徴的な意味に理解すべきなのかは、はっきりしない。キリスト者の間にも両方の意見がある。以前神学校のクラスで、学生たちが数人のグループに分かれ、共に読み合いながら、各自が自分の印象を語り合うときをもったことがある。それぞれの教派(教会)の背景を代弁する人が多く、興味深かった。あなたの印象を聞かせていただきたいと思う。

イザヤが語った二つ目の言葉は、66 章 22 節である。

わたしの造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くように、——主の御告げ——あなたがたの子孫と、あなたがたの名もいつまでも続く。(イザヤ 66:22)

新天新地は、「いつまでも続く」と二度繰り返されている。つまり、新天新地は、今の世界とは異なり、永遠に続くことが強調されている。では、この永遠に続く新しい世界は、どのようなものか。この直前に記されている 66 章 18-21 節は、次のように述べている。

わたしは、彼らのわざと、思い計りとを知っている。わたしは、すべての国々と種族とを集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちののがれた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、遠い島々に。

これらはわたしのうわさを聞いたこともなく、わたしの栄光を見たこともない。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせよう。彼らは、すべての国々から、あなたがたの同胞をみな、主への贈り物として、馬、車、かご、騾馬、らくだに乗せて、わたしの聖なる山、エルサレムに連れて来る」と主は仰せられる。

「それはちょうど、イスラエル人がささげ物をきよい器に入れて主の宮に携えて来るのと同じである。わたしは彼らの中からある者を選んで祭司とし、レビ人とする」と主は仰せられる(イザヤ 66:18-21)。

さらにまた、22 節の後の 23 節には、「毎月の新月の祭りに、毎週の安息日に、すべての人が、わたしの前に礼拝に来る」と主は仰せられる」と続く。

これらの表現はすべて旧約聖書を背景にしている。もし文字どおりに解釈するなら、旧約聖書的な世界に彩られた新しい天と新しい地になる。まさに、ディスペンセーション的な千年王国の姿である。それは無理だとして、比喩的な意味に解釈しようとする人たちがたくさんいる。しかし、単なる比喩的な解釈では間に合わない。その描写は、あまりにリアルな言葉遣いだからである。

私自身は、まず文字通りにそのまま受け止め、イザヤ時代の人々がそのメッセージをどのように受け止めたかをきちんと把握すべきだと思う。なぜなら神は、彼らが理解できるように、イザヤ時代の思考枠と表現法の中で、新しい天と地のすばらしいメッセージを啓示されたからである。新天新地に関しても、神の啓示は斬新的だった。イザヤ時代にはイザヤ時代らしく示された。同様に、新約聖書の時代には、初代教会のキリスト者たちが理解できるフレーム、世界観、言葉使いの中で啓示された。従って、いつの時代のキリスト者も、自分の時代であれば神はどのように語られるのだろうかということを推測する必要がある。つまり、神学的な再考察をし、現代の人々に提唱しなければならないのである。

なお、新しい天と地は、今の宇宙とは全く無関係なものとしてやってくるのか、それとも、今の宇宙の延長線上に築かれるのか、この点でキリスト者の間には意見の違いがある。この問題は、教会の初期時代から論じられてきた。目新しいものではない。講演をお聞きの皆さんは、どのように考えられるだろうか。中には、「新しい」という言葉の意味を明らかにして問題を解決しようとする人々もいる。しかし、そういう方法はナンセンスであろう。

聖書全体の中で、この問題の解決にヒントになるような聖句はないだろうか？ ある。一つだけある。パウロが「全被造物の贖い」ということについて述べている個所がある。

被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現われを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われる

ことを待ち望んでいます。(ローマ 8:19-23)

ここには、キリスト者の贖いと同時に、被造物の贖いについても言及されている。キリスト者の贖いは、全被造物の贖いの先駆けとも、代表とも理解できる。では、キリスト者の贖いとは何か。「わたしたちのからだの贖われること」である。この「からだの贖い」とは、今の我々の肉体の贖いのことである。それはいったい、どのようなものになるのか。聖書は、その点について、ほとんど何も語っていない。ただ、霊には霊にふさわしい体が存在することが明らかにされている(Ⅰコリント 15:40-49)。連続性の中の非連続の世界である。それ以上のことは分からない。人間は、今の世界を理解する言葉と論理しかもっていない。来たるべき世界を認識する能力は、今の世界では与えられていない。新しい天と新しい地は、人間の限界点を越えた世界なのである。だからパウロは、それは目に見えない熱心に待つべき「望み」だと強調している

私たちは、この望みによって救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。(ローマ 8:24-25)。

キリスト者とは、すべてを理解できなくても、信じ望んで生きていく神の民である。見えないからこそ、分からないからこそ、望みをもって生きていくのである。

おわりに

前回の講演では、創世記 1 章から「世界の創造」について考えた。今回の講演では、聖書全体から「宇宙の創造」について見てきた。ここでは、「世界」と「宇宙」をあえて区別した。前者は、我々がこの目で現に見ている世界のことである。後者は、もっと思弁的・抽象的で永遠の流れの中で捉えた宇宙のことである。現代人である我々は、科学的思考をごく当たり前のこととして受け止めている。従って、この両者を切り離す必要はない、というより、切り離すことはできない。しかし、歴史上に表れたすべての人類が、我々と同じ思考パターンに生きていたわけではない。時代をさかのぼれば上るほど、古代の人々にとっては、彼らの目に現に映っている世界がすべてだった。そのことを、忘れてはならない。

紀元前 13 世紀前後の古代中近東の人々にとっては、宇宙といっても、日常生活の中で経験する素朴な世界のことだった。創世記 1 章が描写している創造は、そのような世界観で生きていた人々に向かって記述されたものである。一方、時代も下り、第二イザヤの時代になると、同じ古代中近東の人々でも、かなり違う世界の見方をしていった。新約聖書の時代になると、古代ギリシャ・ローマの世界では抽象的な概念を基にした宇宙観はごく当たり前のものになっていた。

聖書の創造の記録を考察するときには、こういう時代的な背景をよく理解しておかなければならない。そうしないと、「宗教と科学の闘争」みたいな、見当違いの不毛な議論を繰り返すことになる。そのような議論には、この際、きっぱり卒業しよう。パウロは、文化的な違いに生きる人々への宣教について、次のように述べている。

私はだれに対しても自由ですが、より多くの人を獲得するために、すべての人の奴隷となりました。ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。律法の下にある人々には、私自身は律法の下にはいませんが、律法の下にある者のようになりました。それは律法の下にある人々を獲得するためです。律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者のようになりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。弱い人々には、弱い者になりました。弱い人々を獲得するためです。すべての人に、すべてのものとなりました。それは、何とかして、幾人かでも救うためです。私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みとともに受ける者となるためなのです。(Ⅰコリント 9:19-23)

ユダヤ人も、ギリシャ人も福音を必要としている人々である。だからパウロは、自分を捨て、できうる限り相手に合わせようとした。キリスト者は、古代の人々に宣教を試みるのであれば、古代人にならねばならない。中世人には中世人のように、近代人には近代人のように、現代人には現代人のようにならなければ、キリストの福音を届けることはできない。